



ヨット部2013年西医体総合完全優勝！創部30年目の快挙(記事p39)

讚 樹 會

平成26年2月1日発行

CONTENTS

- 02 年頭所感
- 03 退官挨拶
- 04 就任挨拶
- 06 新任教授就任挨拶
- 08 第13回総会開催及び会長選挙理事選挙のお知らせ
- 09 会長選挙立候補者所信表明
- 10 ニュースの窓
- 12 平成25年度研究助成金 受賞の言葉
- 13 理事会議事録
- 14 国外留学助成金留学レポート
- 17 Zoom up
- 18 近況報告
- 20 ☆新シリーズ☆ 創部ものがたり
- 22 「10年後の私」の10年後
- 26 追悼
- 30 支部会・懇親会
- 39 香川大学ヨット部創部30周年の夏
- 41 ACLS活動報告
- 42 第34回香川大学医学部祭を終えて
- 46 平成26年度研究助成金／奨励金応募要領
- 47 編集後記／事務局からのお知らせ
- 48 診療科だより

発行 香川大学医学部医学科同窓会讚樹會
 〒761-0793 香川県木田郡三木町池戸1750-1
 Tel/Fax 087-840-2291
 E-mail dousou@med.kagawa-u.ac.jp
 http://www.kms.ac.jp/~dousou/

発行人 高橋 則尋
 編集人 中村 丈洋
 印刷所 株式会社美巧社



年頭所感



讃樹會 会長
高橋 則尋（1期生）

新年おめでとうございます。今年一年が会員の皆様にとりまして、有意義な一年となりますようにお祈り申し上げます。

さて、本年は午年であります。馬のイメージとは疾走する、でしょうか。同窓会も明確な目標に向けて確実に走り切る1年にしたいところです。1年間、同窓会の皆様のご協力を何卒よろしく申し上げます。

今年度は同窓会総会があり、会長選挙がおこなわれます。別掲にありますように私自身立候補させていただく所存です。通常、任期は2年間ありますので、任期終了時には同窓会設立30周年となります。卒業時から濱本先生とともに同窓会活動をさせていただいた身にとりまして、30年という年月の積み重ねは感慨深いものがあります。よくいわれる20周年は成人式に例えられますが、それでは30周年となりますと、「三十にして立つ」といわれるように分別をわきまえ、精神的には自立した存在でなければなりません。したがって、この2年間、30周年に向けて同窓会活動も自立に向けての序章としなければなりません。

これまでの同窓会活動の基本方針は①会員の皆様の動向調査、②会員の皆様の診療や研究活動へのサポート、特に学内あるいは学外の研究業績向上への援助、③準会員へのサポート、④本学執行部との協調活動としてきました。①としましては、定期的な名簿発行であり、その内容の正確性は他学医学部の同窓会もうらやむ程です。②及び③につきましては研究や留学の助成、本附属病院の研修医マッチ率向上への協調活動、支部会開催の援助などを行ってきました。④は基本方針の根幹といえるもので、本学及び附属病院発展のため、本学執行部とはいわゆる「車の両輪」となるべく、協調性を持って濱本先生はじめ、執行部の先生方、理事会の先生方、並び同窓生の協力のもと、微力ながら私自身も活動の指揮をとらせていただいたつもりです。

さて、「車の両輪」とはどういう意味でしょうか。辞書によりますと、二つのうち、どちら

を欠いても役に立たないほど密接な関係にあることのとえ、となります。本学執行部と同窓会はまさにこの関係にあると言っても過言ではありません。しかし、私自身はもう一步進めて考えてみたいと思います。つまり、この例えはあくまでも静的なイメージしかありません。しかし、本来、車は前進あるいは後進してこそ、その存在意義を示します。したがって、車の両輪は各々が一致して前に、あるいは後ろに回転してこそ、はじめて動的に働くことが出来ます。その際、片輪ずつが同じ回転数で回転しなければ、正しく前進できません。ですから、車の両輪は密接な関係であるだけでなく、かつ同じ志を持って正しく回転した時に本来の役割を果たすものであると言えます。それでは本学の車の両輪の正しい回転とは何でしょうか。唯一点、本学並びに附属病院が当事者や第三者に貢献し得る正しい発展のみと考えます。当然ながらそれには本学同窓生の協力や献身が必要になります。同窓会はその志を有する同窓生を全面的にサポートする所存です。

今回の会長選において選任されました暁には、この2年間、ここにあげた同窓会活動をより自立した同窓会としたいと考えます。先ほど述べたように同窓会としての片輪は本来の役割を全うするために正しく回転を続けなければなりません。また、自立した団体として、万が一、もう片輪が必要とするならば、微調整のお力添えをすることがあるかもしれません。その時には濱本先生や執行部・理事会の先生方のお知恵を借りて、私自身が判断を誤らないように頑張っていきたいと思います。

以上をもって、新年の挨拶にかえたいと思います。

退官挨拶

真夏のサンタクロース



香川大学 元副学長・名誉教授
阪本 晴彦

この度、香川大学副学長の任期満了により香川大学を退職致しました。

私は和歌山県立医科大学卒業後、常に医学部において病理学の教育、研究、診断に携わってまいりました。また、香川大学医学部長の3年8カ月、副学長の2年間は医学部或いは大学全体の運営に携わり、さらに国際交流や瀬戸内国際芸術祭などこれまでと違った得難い経験をさせていただきました。ここまで、無事過ごせましたのも皆様方の温かいご支援の賜物と感謝する次第です。

この機会に、大学卒業後最も楽しい期間であった留学時代のことを紹介したいと思います。

留学は33歳の時、オーストラリアのメルボルン大学への1年間であった。もともと和歌山医大の病理学講座で肝炎と細胞性免疫のテーマで研究をしていたが、偶然、分離した単球に血小板が混入すると単球の貪食が増加することを見つけて、このことが頭からずっと離れなかった。このことをアメリカから来ていた免疫学者であるGottlieb教授に話したところ、血小板の研究者であるメルボルン大学のPenington教授を紹介してくれたことから、留学することになった。

オーストラリアの面積は日本の20倍、当時の人口は東京都くらいで資源は豊富で人々は決してがつがつと働くようなことはせず、lazyな時間を楽しんでいた。家族（家内と3人の子供たち）が一緒であったが、私は折角の留学で実験に専念できることから、休みの日も構わず仕事に出かけたりして、同僚から不思議がられたこともあった。しかし、私の指導者役をしてくれたFrankは日本の状況に精通していてオーストラリアにいるときこそ私が実験に専念できる時であることをよく理解してくれていた。とは言え、日本にいる時と比べると休日はよく遊びに出かけたように思う。メルボルンで知り合った日本人の留学生とゴルフに出かけたり、家族とドライブ旅行に行ったりもした。

留学で家族が一緒であることがプラスであることは、何とんでも精神的に安定できること、家族全員が同じ思い出を共有できることかと思う。マイナスの面があるとしたら英語があまり上手にならないことかもしれない。週末には家で日本語漬けになるので、月曜の朝は英語がさっぱり聞き取れないということがよくあった。子供は英語に慣れるのが恐ろしく早かったが、

帰国後忘れるのも早く、とても帰国子女と呼べるようなものにはならなかった。子供の英語力という意味からもせめて2年くらいの留学期間があったらよかったのと思う。

また、休みの日にはよく動物園に出かけた。オーストラリアは生物学的にも特異な環境でオーストラリア特有の動物が沢山いる。コアラやカンガルーは有名であるが、卵生哺乳類のカモノハシ、有袋類で小さな熊のようなウーンバット、大きく足の速いエミューなど枚挙にいとまがない。

研究の方は日本で見つけた血小板による単球の貪食亢進の仕事をそのまま継続したらよいとPenington教授が言ってくれたので、一年間じっくりと続けることができた。自分としては、留学先の教室で行われている仕事にも関わって研究の範囲を広げたかったのであるが、自分の仕事が進みだすとそれどころではなくなってしまった。実は、血小板にしても単球にしても基礎的なことは何も知らず、それまでの肝臓の仕事を放りだして全面的に血小板・単球の仕事に関わることは大きな賭けと言えた。しかし留学先が血液専門の内科ということもあり、この研究に没頭することができた。また、自分としては自分で考えた貪食を顕微鏡で判断する方法が何か幼稚と感じていたが、「仕事が進む間は方法を変えないで、もし進まなくなったらその時点で考えればよい」とのFrankの助言でずっと自分で考えた方法で行ってきた。わずか一年であったが、血小板から放出されるATPとADPが単球や好中球の補体受容体を介する貪食を更新させる証拠を見つけることができて、2つの論文を残すことができた。オーストラリアでの一年間、研究に没頭できたおかげで、現在までの私の血小板の仕事が続いていると言える。

2月にオーストラリアへ行って、12月頃には概ね仕事が出来上がっていたので、クリスマスは割にゆっくりと過ごすことができた。オーストラリアの12月は真夏であるが、子供相手のイベントでは暑苦しい衣装のサンタクロースが汗だくになってプレゼントを配っていたのが印象的であった。子供たちは勿論大喜びであったが、自分にも「よくやった」と褒美を貰ったような幸せな気持ちであった。

就任挨拶

香川大学副学長(国際戦略・地域連携担当) 就任御挨拶



香川大学 副学長

板野 俊文

讃樹會の会員の皆様におかれましては、益々ご健勝のことと存じます。

さて、2年前に医学部教授を卒業し、香川大学本部理事(総務・研究担当)に異動しました。その時に御挨拶をしてから、あっという間に時が過ぎ、平成25年9月末で任期が切れ、10月よりタイトルのような職に異動しました。このスペースを借りまして、現在の仕事を紹介し、御挨拶にかえさせていただきます。

国際交流について

香川大学における当面の国際交流戦略とは、いかにして「グローバル人材の育成」を行うかということです。最近の学生の内向き志向によって、海外に留学する若者が減少していることは御承知の通りです。「日本に十分満足している。何を苦勞して海外に」と考えている学生は多いのです。しかし、若い時の海外生活は、単に外国語の習得のみならず、異国で異民族と暮らすという経験を与えてくれます。それは一生の宝物であると思います。

現状の問題点としては

1. お金がかかる
2. 留年する確率が高い

というのが主な理由です。これらの問題を解決するため、学内での奨学金制度の新設と、交流協定校との単位互換制度の導入を検討しております。讃樹會会員の皆様方にはご協力をお願いいたします。

また目標設定を行いました。「留学生400名、日本人学生100名派遣(4&1略)計画」です。どのようにして留学生をふやすか、派遣学生をふやすかを各学部より代表の先生方に出てきていただいて、具体的な戦術をたてて少しずつ解決をしていこうとしています。

地域貢献について

国立大学が法人化以降、ミッションとして「教育」「研究」に加えて「地域貢献」が3本目の柱として加わりました。いかに大学が地域と連携して「地元になくはならない大学」となるかが大切になっています。この目的達成のため長尾省吾学長のリーダーシップのもと、この2年間サテライトオフィスを県内4か所に設置し、2週に一度のペースで各会場で大学教員がセミナーを行っています。

また平成25年度に文部科学省の「地(知)の4拠点

整備事業」に申請を行い、採択を受け、「自治体連携による瀬戸内活性化の地(知)の拠点整備事業」のタイトルで活動を開始しています。これは大きく教育、研究、地域貢献に分類されるのですが、それぞれ新しい概念で進めていくことが求められています。例えば教育ですが、従来の講義形式で教員が一方通行で講義を行うのではなく、フィールドワーク型の問題解決型の授業を取り入れることが求められています。学生は地域(自治体)に出ていき、各種テーマを地域に求め、問題設定を行い、様々な活動を行うことによって問題解決を図るというものです。PBL(Problem Based Learning)の地域版のようなものです。研究もより地域に根ざしたものが要求され、地域のニーズをくみ上げ、大学の知やシーズとのマッチングを行い、問題解決を図るというものです。また地域貢献は地域の方々の生涯教育学習と如何にかかわっていくかというものです。

次に地域貢献の新たな目標として「香川の水を考える」プロジェクトを立ち上げています。これも長尾学長の発案で、香川大学の知を結集し、昔より悩まされてきた香川県の水問題を解決しようというものです。プロジェクトは「水を知る」「水を守る」「水を作る」の3つに大別され、それぞれの専門分野が協力し、産学官の連携を香川大学が中心となって進めていこうというものです。

これらの仕事をとおして、「地域に根ざした学生中心の大学」を目指していきます。諸先生方の一層のご協力をお願いいたします。

就任挨拶

副学長に就任して



香川大学 副学長
医学部泌尿器科教授

笥 善行

このたび平成25年10月1日付けで、阪本晴彦先生の後任として副学長（情報担当、図書館長）を併任することになりましたので、一言ご挨拶を申し上げます。

ご存じの様に私は、平成23年4月から千田彰一病院長の下で診療担当の副病院長を務めて参りました。ところが昨年秋、医学部附属病院の開院30周年記念行事を開催するという時期に、長尾学長から思いもかけないお話をいただきました。まだ現役の教授として6年ほど任期が残っておりましたこともあり、また、副病院長としての業務を中途半端にして後の方に多大なご迷惑をかけることを考えますとどうにもお引き受けできる状態ではありませんでした。一方で、香川大学と香川医科大学が平成15年に統合しました後、初めての医学部出身の学長となられた長尾先生から香川大学の現状をお聞きするにつけ、医学部だけは別世界と知らぬ顔も出来ないことも徐々に理解させていただくようになりました。最終的には千田病院長はじめ、病院の執行部の皆様や安全管理部のスタッフの皆さんに快く了解していただくことになりました。

さて、現在は医学部や病院での業務と本部での仕事を3対1くらいの比率でさせていただいております。長尾学長からは2対1くらいを最低限求められているとは思いますが、まだまだ大学本部での仕事は不十分な状態といえます。それでも、医学部出身以外の先生方との交流や他学部の学生、大学本部や他学部の事務職員の方々との交流が一気に増え、大いに刺激を受けております。当面の私に課せられたミッションの一つは、本年4月に完成いたします「アカデミック・コモンズ（仮称）」という新しい学習空間の立ち上げであります。この建物は改装中の学生食堂やカフェテリアのある棟と、これまた改装中の図書館の間をつなぐもので、学生と教職員の交流スペースとして想定されています。ラーニングコモンズないしはアカデミックコモンズという言葉は恥ずかしながら今回の仕事をさせていただくようになるまで全く知りませんでした。ご承知の様に電子ジャーナル時代となり、数多くの蔵書に囲まれて、咳払い一つもはばかれる静寂なイメージの図書館は時代遅れとなりつつあります。そこで図書館を学生と教職員の交流スペースに活用し、新

たな学習スタイルのいわば実験基地にしようとする試みがいくつかの大学で開始されています。今回建造中のこの交流スペースは、香川大学が現在大きな目標の一つとしていますがグローバル人材の育成にも大きく貢献することが期待されています。この交流スペースの中には、「イングリッシュ・カフェ（仮称）」を設置する予定になっています。ここでは、本学の学生や留学生、英語教員などがコーヒーや軽食を持ち込み、英語のみで談笑や議論をすることにしております。現在、イングリッシュ・カフェの導火線となり活性化させてくれると思われる様々な部署の方々を案を練っているところですが、医学部の教職員や学生の皆様のお知恵も是非、拝借させていただきたいと思っております。忌憚のないご意見をお待ちしております。

香川医科大学と香川大学が統合して10年が経過いたしました。この間に大学を取り巻く環境は大きく変容してきました。独立行政法人化は大きなきっかけになっておりますが、かつての象牙の塔ではとうてい許容されない環境となり、大学の活動内容や社会への貢献が国民の目に明らかに写ることが強く要求される様になってきたようです。全国の国立大学法人は昨年からの3年間の改革加速期間に突入しております。この間に大学改革を見える姿で立案、実行して行かねばなりません。改革が順調に進む大学には補助金を出す一方、改革の遅い大学には財政面での一層のペナルティが科せられるという、学問の府に対する厳しい締め付けの時代になっています。この様な状況下で、医学部と附属病院に対しては、香川大学の頼みの綱として期待が増すばかりの状況です。このような昨今の状況に対して、期待されるばかりで医学部へのメリットは何もないのではないかとこの不満を時に耳にいたしますが、私は香川大学という多面的、多方向的指向性を有するアカデミア集合体の中でこそ医学部の将来は拓けると信じております。讃樹會会員の皆様の香川大学への一層のご理解とご支援をお願いする次第です。

新任教授就任挨拶

教授就任にあたって

「オリジナル」な思考の基盤形成をめざして

香川大学医学部 形態・機能医学講座 分子神経生物学 教授

山本 融



平成25年8月1日付けで板野俊文先生の後任として着任いたしました。香川大学医学部医学科同窓会讃樹會の諸先生方にこの場を借りましてご挨拶を申し上げます。

高校を出て神戸の街を離れてから、気がつけば、こちらで6つめの大学・7つめの機関・8つめの学部・研究所ということになります。住んだことのある街も神戸・東京・仙台・ニューヨーク・札幌を経て6つめです。節目節目でお誘いに応じて異動しているうちに、気がつけばこういうことになっておりますが、それぞれ特色のある街での生活も大いに満喫し、楽しんできました。この度、陽光降り注ぐ香川の地で新たな生活を始められることを家族共々喜んでおります。美しく暮れなずんでいる高松の街を大学から眺めておりますと、良いところに来たなあ、と実感いたします。なお、私の名前ですが、これで「とおる」と読みます。

これまで私は、オリジナリティーを唯一の拠りどころにして研究を進めてきました。そして、幸いなことに多くの引用をいただいている原著論文を何報か発表することができました。オリジナリティーとは、自分がその場に居なければ生み出されなかったものを生み出すことができる力のことをいいますが、ライフサイエンスの場合ですと、対象とする現象を原子・分子レベルから組織・個体レベルまで必要に応じて自在に行き来しながら正しく把握する能力が、こうした力の基盤となります。「オリジナル」な思考ができる能力を育むには、一見複雑に見える自然現象が、実は比較的少数の原理により構築されていることを理解・把握するとともに、とすれば雑多で散らかりがちな知識をこうした理解の元に統合していく営みが必要です。こうした基盤を確立することがオンリーワンの思考を「正しく」進めていけるようになるための第一歩だと考えています。

前任地では、学生さん達のこうした能力を培い、さらに、私がこれまでに開拓してきた研究テーマを演習問題として課すことによって伸ばし・鍛え上げることにより、未知の現象に対して、確固とした足場から、独自の視点により柔軟に立ち向かうことのできる人材を世の中に送り出してきました。修士・博士まで育てた数は必ずしも多くはありませんが、「このような人材を育てた人に会いたい」というお世辞とともに就職先の上司が尋ねてきてくれたことも一再ならずありましたので、大学教員としての最低限の仕事はできていたのかな、と思っています。また、こうした学生さん達の努力により、研究も一定の進展を遂げることができました。現在、中枢神経系を主なフィールドとして、その成り立ちと維持の分子機構の一端を明らかにするとともに、国内外の先生方との共同研究により、アルツハイマー病や統合失調症・自閉症スペクトラムの発

症機構に迫りうる新たな橋頭堡を築きつつあります。

香川大学医学部におきましては、こうした経験を活かし、有為な医家を輩出する一助となるべく微力を尽くしていきたいと考えています。私の本学における使命の一つは、医師を目指す学生さんが医学の大海に飛び込む前に、泳ぎ切れるものにはより遠くまで泳いでいける力を、また、その自信のない者にはこれに溺れてしまわぬよう、泳ぎ切れるだけの基礎体力・脳力を育むにあります。「知」よりも「智」、断片化した知識よりも現象を通底する考え方・原理を理解してもらうことに重点を置き、今後習得していかなければならない広範な知識を整理・統合していく上での確固たる土台を築いていく手助けをさせていただきたいと考えています。また、これら学務とともに、ヒトの知の座である脳がどのように形成・維持されているのか、また、その破綻はどのようにして起こりうるのか、その分子機構について、さらに解析を進めて参りたいと考えております。

現在、香川大学医学部では教育カリキュラムの大幅な改訂が進められております。医師・看護師・薬剤師・技師よりなる医療チームを牽引できるグローバルな視点と、これを支える生命現象に対する深い理解を併せ持つ医師の輩出を目指して、微力ながらその一翼を担うべく努力して参る所存です。全国津々浦々でご活躍の先生方の周辺の有為な人材で医師を志す若者がおられましたら、母校の香川大学医学部を、これまで以上に勧めていただければ幸いに存じます。末尾になりましたが、讃樹會の諸先生方の益々のご発展を祈念いたしまして、新任の挨拶に代えさせていただきます。どうぞ、よろしくお願い申し上げます。

略歴

- | | |
|---------|-------------------------------|
| 昭和62年3月 | 東京大学薬学部薬学科卒業 |
| 平成元年4月 | ロックフェラー大学 訪問研究員(平成2年6月まで) |
| 平成3年4月 | 日本学術振興会特別研究員(DC) |
| 平成4年3月 | 東京大学大学院薬学系研究科生命薬学専攻博士課程修了 |
| 平成4年4月 | 日本学術振興会特別研究員(PD) |
| 平成5年4月 | 東京大学分子細胞生物学研究所 助手 |
| 平成11年4月 | コロンビア大学 博士研究員 |
| 平成12年6月 | 東北大学加齢医学研究所 助手 |
| 平成15年5月 | 理化学研究所 発生再生科学総合研究センター 研究員 |
| 平成18年4月 | 北海道大学大学院薬学研究院 助教授(19年4月より准教授) |
| 平成25年8月 | 香川大学医学部 教授 |

香川大学医学部医学科同窓会讃樹會

第13回総会開催及び会長選挙理事選挙のお知らせ

本年は、2年に一度の定期総会を開催します。香川大学医学部医学科同窓会として更なる展開、飛躍を目指し、たくさんの方のご意見をいただきたいと思ひます。ご多忙中とは存じますが、会員の皆様お誘い合わせの上、多数ご出席いただきますようお願い申し上げます。

なお、やむを得ず欠席される正会員の方は、同封の委任状をご送付頂きますようお願い申し上げます。委任状を含め、正会員の十分の一以上の参加をもって、総会が成立いたしますので、ご協力宜しく願ひします。尚、特別会員、賛助会員、名誉会員、準会員の方には総会での議決権がございませんので、あらかじめご容赦下さい。

日時：平成26年5月24日（土）15時より
場所：臨床講義棟一階

会長選挙公開開票 14時～15時
総会 15時～15時30分
記念講演 15時30分～17時
懇親会（別会場） 18時～

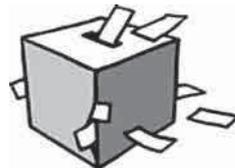
総会議題 ①平成24・25年度事業報告
②平成24・25年度決算報告
③平成26年度予算案
④理事会からの審議項目



会長選挙

同窓会報46号（平成25年9月号）にて告示致しました会長選挙につきまして、立候補者が高橋則尋現会長のみとなりましたので信任投票を行います。

総会開催前に選挙管理委員会が公開で開票し、新しく就任が決定した会長が総会の開催宣言を行います。つきましては、投票締切日を厳守し、郵便投票または直接お届けいただきますようお願い致します。

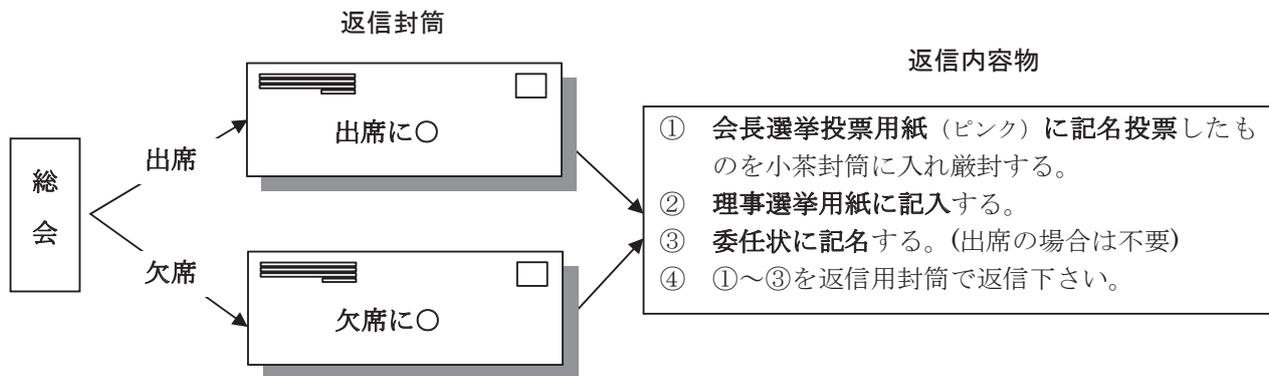


理事選挙

同様に会報にて告示致しました理事選挙につき、会員のみなさまから次年度理事を卒年単位でご推薦いただきました。上位に推薦されました会員が次年度の理事候補者（別紙）となっていますので、信任投票をお願い致します。

選挙管理委員会委員長 松本義人

《総会出欠の返信および郵便投票方法について》



郵送返信締切：5月20日（火）午後5時到着分まで有効（直接投票の場合は総会当日の公開開票まで）

平成26年・27年度 讃樹會会長選挙立候補者所信表明

所信表明

香川大学 医学部医学科 第1期生 昭和61年卒

高橋 則尋

(現：同窓会会長)

今回、平成26年度・27年度同窓会会長選挙にあたり、立候補を表明させていただきます。

まずは過去2年間、平成24年、25年と会長職をさせていただきましたが、その間の同窓会事業を総括させていただきます。前回の所信表明にも書かせていただきましたが、同窓会活動の根幹として

1. 卒後研修センターへの協力
2. 大学運営への協力
3. 同窓生のプロモーションへのサポート
4. 同窓会事業の見直しと法人化

の4点について、挙げさせていただきました。会員の皆様、理事会員の皆様、執行部会員の皆様の温かいご協力、ご援助の元に何とか最低限の仕事は出来たのかなと思っております。

今回、再選されました場合の平成26年、27年の2年間におきましても、同様に地道に活動を続けてまいりたいと思います。さらに、本同窓会も平成27年をもちまして設立30年となります。従来から言われておりました「新設」という言葉から脱却する時が来たのではないかと、そう考えております。特に、大学運営への協力という点で、今までの方法論とは軸足をさらに発展させ、大人の協力が必要ではないかと思っております。いまだ、具体案は持ちませんが、局面、局面において名誉会長濱本先生とも相談しながら、適切に対応していきたいと考えております。

以上、簡単ではございますが、今後の同窓会活動における心境の一端を述べさせていただき、所信表明に代えさせていただきます。何卒、よろしく申し上げます。

推薦状

平成26年・27年度同窓会会長選挙立候補者 高橋 則尋 氏
 推薦者 香川大学同窓会 第1期生

推薦人

推薦者 1. 香川大学同窓会 会長 高橋 則尋
 2. 香川大学同窓会 副会長 高橋 則尋
 3. 香川大学同窓会 理事 高橋 則尋
 4. 香川大学同窓会 理事 高橋 則尋
 5. 香川大学同窓会 理事 高橋 則尋
 6. 香川大学同窓会 理事 高橋 則尋

推薦状

平成26年・27年度同窓会会長選挙立候補者 高橋 則尋 氏
 推薦者 香川大学同窓会 第1期生

推薦人

推薦者 1. 香川大学同窓会 会長 高橋 則尋
 2. 香川大学同窓会 副会長 高橋 則尋
 3. 香川大学同窓会 理事 高橋 則尋
 4. 香川大学同窓会 理事 高橋 則尋

推薦状

平成26年・27年度同窓会会長選挙立候補者 高橋 則尋 氏
 推薦者 香川大学同窓会 第1期生

推薦人

推薦者 1. 香川大学同窓会 会長 高橋 則尋
 2. 香川大学同窓会 副会長 高橋 則尋
 3. 香川大学同窓会 理事 高橋 則尋
 4. 香川大学同窓会 理事 高橋 則尋
 5. 香川大学同窓会 理事 高橋 則尋
 6. 香川大学同窓会 理事 高橋 則尋

ニュースの窓

香川大学医学部附属病院開院30周年記念行事に参加して

2013/12/14

平成25年12月14日（土）J Rホテルクレメント高松で、香川大学医学部附属病院開院30周年を祝う記念式典および祝賀会が執り行われました。記念式典では最初に千田彰一病院長が「患者や地域医療を支え、大きな志と使命感を持ったスタッフが地域および国内医療機関とつながり、大学病院として医療をリードしていきたい」と式辞を述べられました。続いて長尾省吾学長が「県民の期待に応え、健康増進や医療水準の向上に貢献することが附属病院の責務であり、医療人材の育成や教育研究機能の充実をさらに推進していく」と挨拶されました。引き続き、布村幸彦文部科学省高等教育局長、浜田恵造香川県知事、森下立昭香川県医師会会長が祝辞を述べられました。式典後の記念講演会では日本医学会会長高久史磨先生に「21世紀の医学と医療」と題してご講演いただきました。先生ご自身の医師生活や生き方などについても語られ、温かいお人柄を垣間見ることができました。

そして参加者全員の記念写真撮影の後、記念祝賀会が開催されました。森望医学部長の挨拶に続き、ご来賓からの祝辞、鏡開き

が行われた後、今井正信三豊総合病院名誉院長が乾杯の挨拶を述べられました。ご来賓の方々、医師会関係の方々、関係医療機関の方々、教職員、学生など参加者全員での賑やかな懇親会が続き、



高久日本医学会会長ご講演

最後に篤善行香川大学医師会副会長の締めめの挨拶で祝賀会が盛会のうちに閉会となりました。厳かな記念式典と盛大な祝賀会であり、出席者全員が30周年の節目を祝うとともに、香川県の地域に根差した医療・医学のさらなる発展を誓う会となりました。

（香川大学医学部附属病院総合診療科 舛形 尚）



千田病院長式辞



祝賀会の乾杯・鏡開き

香川大学医学部附属病院 平成25年度医師臨床研修マッチング結果報告

平成26年度から医師になる医学生が臨床研修病院を選ぶ平成25年医師臨床研修マッチング結果が2013年10月24日に公表され、本院マッチ者数は27名でした。標準研修プログラム（ULTRA MANDEGAN）に25名、小児科プログラムに2名となっています。母校への想い・期待を抱いてくれた本学の26名に加え、1名の本学外出身者の皆さんが、新年度より本院臨床研修に参加予定であることを大変嬉しく思います。

本年度のマッチ者数は昨年度に比べ11名激減しており、過去8年間において最低の状況で、臨床研修の危機に直面しています。早速、臨床研修の課題への対応と、より一層の研修の内容と質の向上に取り組むことを念頭に、次年度に向かって既に舵を切っています。

本院の医師育成は、私が現職を拝命した際にはまさにどん底でした。その後、関係各位の皆さんが一致団結した結果、劇的に回復・発展できております。本院の研修の特長として、卒後研修修了者の220名余りが、引き続き本院診療科に属し、各スペシャリストを目指し研鑽し、着実に専門医資格を取得されています。多くの医師が集い、切磋琢磨するよりよい環境が構築されつつある状況です。

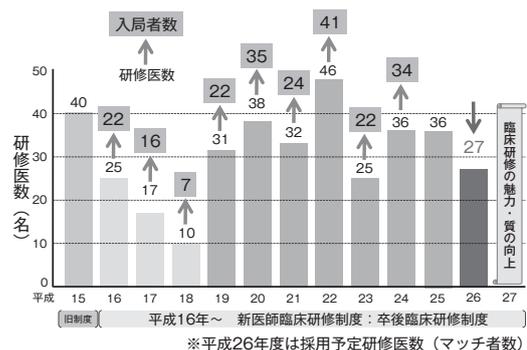
讃樹會会員の皆様のご家族・ご親類の医学生に、本院臨床研修にご参加頂ければ幸いです。専任医師・副センター長として、順調な研修スタートとなるよう、全力

でサポートする所存です。

今後とも、絆を活かした医師育成を目指し、本院・香川県の地域医療を中心となって担える優れた医師を輩出できるように努めてまいりますので、引き続き讃樹會会員の皆様のご理解とご協力を賜りますようお願いいたします。

卒後臨床研修センター 副センター長（専任医師）
松原修司（七期生・平成4年卒）

【香川大学医学部附属病院の医師研修医数の推移】



第4回讚樹會市民公開講座開催

2013/11/09



鈴木康之先生「最も怖いがん『すい臓癌』を克服するために」



有馬信男先生「腰痛 —診察室で診ていること—」

香川大学医学部医学科同窓会讚樹會主催の市民公開講座が、平成25年11月9日（土）15時から17時、サンポートホール高松で開催されました。回を追って認知度が上がり、4回目を迎える今年も、定員を大幅に超える盛況となりました。

開会にあたり、宮野病院副院長安岐康晴讚樹會副会長が挨拶され、市民の健康増進に役立つようにという市民公開講座の主旨に触れていただきました。

続いて、講演1として香川大学医学部消化器外科教授の鈴木康之先生より「最も怖いがん『すい臓癌』を克服するために」と題して講演が行われました。

スライドの表紙は、鈴木先生がプライベートで撮影された瀬戸内海の写真で、見慣れた風景に会場がほっとした雰囲気スタートとなりました。すい臓がんは、早期には無症状であるため、病院を訪れて診断された時には既にステージが相当に進んだ場合が全体の7割に及び、5年生存率が6～7%程度しかなく、手術後も再発が多い極めて恐ろしい癌であることを、わかりやすくグラフ化された統計資料で説明いただきました。糖尿病や喫煙がすい臓癌の危険因子ということですが、検査を受けて早期発見することが非常に重要で、ある程度のステージまでは外科切除で根治の可能性があるということです。更に、有望な抗がん剤が出てきており、術前化学放射線療法と手術と組み合わせた治療を行うことにより、病気を克服し余命が長くなることが期待できるという最前線のお話を伺うことができました。

参加者から、手術が出来ない人とはどのような場合か、検診センターでの結果について、定期健診の頻度、術後の定期検診の内容等、次々と真剣な質問が出ました。

座長は、高松赤十字病院腎臓内科部長高橋則尋讚樹會会長に担当いただきました。

引き続き、講演2として、香川大学医学部附属病院リハビリテーション部病院准教授の有馬信男先生によって「腰痛 —診察室で診ていること—」と題して講演が行われました。

有馬先生はお話に入る前に簡単な腰痛体操を手ほどきされ、全員が立ち上がって両手を大きく広げて背筋を伸ばしました。

国民病といわれるくらい多くの人が悩む腰痛ですが、その70～80%が特定の原因のない非特異的腰痛だということです。外来では、まずは重篤な病原や症状を早く診

断して治療することであるとし、1か月以上痛みが続く場合は必ず検査を受けるように勧められました。腰痛の原因や、治療方法についても症例を紹介しつつガイドラインに沿って詳しく説明いただきました。また、リハビリテーション部の療法士さんをモデルにした、体が硬くて前屈が出来ない人でもすっと曲がるようになる「魔法の体操」の動画を見て、早速試したくなった人も多いためです。

質疑応答では、側腕症、圧迫骨折、ヘルニア、整体など様々な質問の手が挙がりました。答えの中で有馬先生がおっしゃった「女性は平均年齢を越えたら、そして男性は80歳を越えたら、基本的にエリートです。80歳以下で年寄りと言っていたらいけないという時代だと思えます。」という言葉は、参加者にとって大変勇気づけられるものでした。

座長は、香川大学医学部循環器・腎臓・脳卒中内科病院教授の大森浩二先生に担当いただきました。

最後に濱本龍七郎名誉会長から、演者の先生、座長の先生方への謝辞と、参加いただいた市民の皆様にお礼が述べられました。



▲会場のサンポートホール高松から夕暮れの高松港を臨む

平成25年度 研究助成金／研究奨励金 受賞のことば

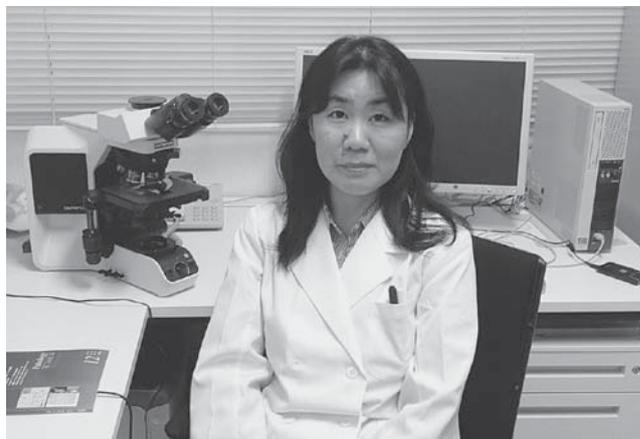
研究助成金部門受賞

東京都健康長寿医療センター
病理診断科

松田 陽子
(平成10年卒)

今回、「幹細胞マーカーnestinのリン酸化制御による膀胱癌分子標的治療の研究」という研究テーマで、平成25年度研究助成金を賜り、大変光栄に存じます。Nestinは、細胞質内に存在する中間径フィラメントタンパク質の一種です。中間径フィラメントは細胞の種類によってその発現が大きく異なり、上皮系細胞にはkeratin、間葉系細胞にはvimentin、神経膠細胞にはGFAP、筋細胞にはdesminが主に発現しています。Nestinは未分化な細胞や増殖の盛んな細胞に発現する、特殊な中間径フィラメントタンパク質です。Nestinと膀胱癌についての研究を、日本医科大学病理学教室で、石渡准教授のご指導のもと行ってまいりました。その結果、nestinが膀胱癌の遊走、浸潤、転移や幹細胞性を制御する重要なタンパク質であることを解明することができ、nestinを抑制することが新たな膀胱癌の治療法となる可能性があることを明らかにしました。これまでの研究成果を踏まえ、今後はnestinを具体的に制御する方法の探索に目を向けております。その一つが本申請課題であるnestinのリン酸化制御で、これによりnestinの活性を抑制する機構を解明し、膀胱癌の治療法の開発に結び付けることを目指しています。

12月より、東京都健康長寿医療センター病理診断科に転勤し、さらにこの研究を発展させたいと考えております。東京都健康長寿医療センターは、板橋区にあり、病院と研究所が併設されており、高齢者疾患の急



性期医療および研究において我が国の中心的な施設の一つです。様々な病理検体について、丁寧で詳細な病理学的検討やサンプルの保管、臨床データの蓄積が長年にわたって行われており、病理学的研究を志す者にとって最適な施設だと思います。また、病理解剖の症例が豊富であり、部分的な検査では解明できない全身病態の解明に力を注いでいます。私は当センターにて、病理医として正確な病理診断を心がけるとともに、臨床現場や研究所と連携し、本申請課題を進めてまいりたいと考えております。高齢化時代における健康と長寿、および癌というテーマは、まだ私には漠然としておりどこから手をつけていけばよいものか分かりませんが、今回の受賞を励みに、膀胱癌をはじめとする様々な悪性疾患の高齢者医療に少しでも力となれるよう、頑張っていく所存です。最後になりましたが、同窓会関係者の皆様方ならびに助成対象研究のご選考にあたっていただきました選考委員の諸先生方に厚く御礼申し上げます。

研究奨励金部門受賞

香川大学医学部
小児科

中村 信嗣
(平成16年卒)



この度は讃樹會研究奨励金を頂き、大変ありがとうございました。この讃樹會研究奨励金申請は二度目でしたが、前は惨憺たる採点結果であり、相当落ち込みました。今度こそは！と臨んだ今回、受賞できたことは本当に嬉しいです。2014年1月9日、腰椎椎間板ヘルニアに対する手術を香川大学整形外科・麻酔科にさせていただき、この報告文を病院ベッド上で書いています。術後経過は良好です。

私は研究を始めて6年の若輩者です。学生時代は研究には縁が無いと思っていました。ところが、いつの間にか研究の世界から足を洗えず・・・とうとう今春、研究留学まですることになりました。いつも、「本当に俺なんか研究やらせていいのかな？あとはどうなっても知らないぞと。」と思いながらも、「何か面白いことが起こるんじゃないのか？」という冒険心も刺激されるため現在まで研究を続けてきました。このような冒険心を刺激されたいい年をした中年男性たちが一頭の新生仔豚を囲みながら談笑したり、時に激しい議論をしたりする光景は・・・研究って本当に恐ろしいです（笑）。

私たちは、NICUで新生児の重症管理を行っていますが、P（新生仔豚）ICUもあり、そこで研究を行っています。NICUは平和なのに、PICUでは豚が大暴れしたり、死にかけたりと・・・。なぜか自分が担当した週末に豚がよく死ぬということがおき、有らぬ濡れ衣を着せられそうになり、この疑いを晴らすには本当に苦労しました。こうした研究を2年繰り返すうちに、ようやく理想とする新生仔豚仮死モデルを作成することができました。

さて私の研究テーマは、新生児における脳循環代謝に関する研究です。新生児低酸素性虚血性脳症（HIE）は、新生児領域では非常に予後不良な疾患であり、脳性麻痺の主要原因の一つでもあります。日本は新生児死亡率が世界で最も低い国の一つである新生児医療先進国でありながら、その本邦においても年間約400人もの重症HIE児が出生しています。こうした重症HIE児の早期診断と予後改善は、少子化が進むわが国では急務です。先ほど述べた新生仔豚仮死モデルを応用し、新しいHIEの診断方法と新しい脳保護治療法の開発を目指しています。また今春からは、オーストラリア・モナッシュ大学へ留学し、胎児羊を用いた早産児脳障害に関する共同研究を行う予定です。

貴研究奨励金による本研究が子供たちの予後改善に貢献できるよう、日々精進を重ねていく所存であります。このたびは本当にありがとうございました。

理事会議事録

平成25年度第2回 平成26年1月27日(月) 20:00~21:00

1. 国外留学助成金審査

学術局による一次審査を通過した平井宗一先生（平成14年卒）、中村信嗣先生（平成16年卒）の2件の申請に対し、理事会による二次審査が行われ、助成額が決定した。

2. 第13回定期総会開催について

開催日候補は5月の第3土曜日又は第4土曜日とする。記念講演の講師との日程調整により総会開催日

程を決めたいという意見が執行部を代表して高橋会長から提案され、理事に承認された。記念講演講師はこれから交渉し決定される。

3. 会長選挙の立候補者、理事選挙の理事候補者の公表と選挙実施の確認

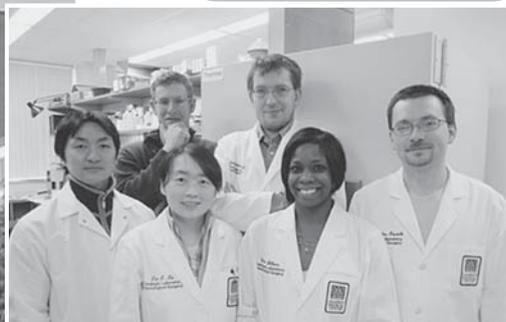
会長選挙立候補が高橋則尋現会長一人であることと、理事候補が決定したことが報告され、選挙実施のスケジュールが確認された。

国外留学助成金 留学レポート

オハイオ州立大学&ハーバード大学 留学記

脳神経外科 小川 大輔 (平成15年卒)

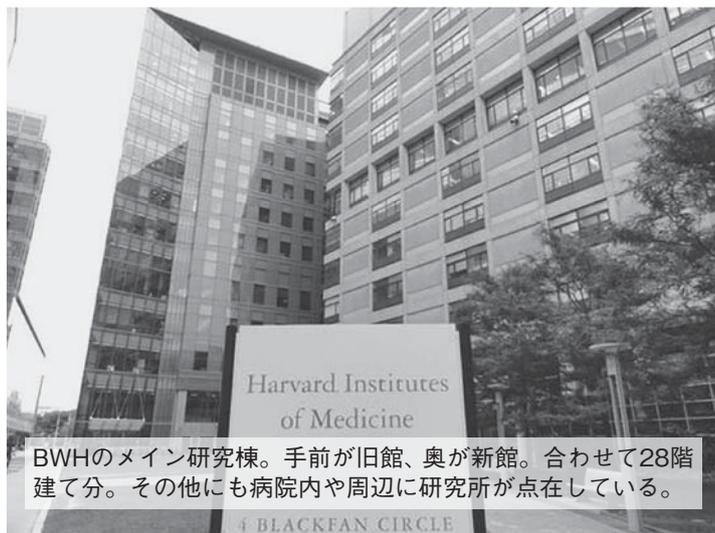
11階建てオハイオ州立大学附属病院。写真左上、屋上に搬送用ヘリ。入れ替わりで搬送してくる。現在はこの2倍の高さの新病棟を建設中。



OSUのラボメンバー。イギリス人、ポーランド人、イタリア人、中国人、アメリカ人、日本人と国際色豊かで、いつも笑い声が絶えない。

2010年9月から2012年8月までアメリカはコロンバス市のオハイオ州立大学(The Ohio State University; OSU)と、2012年9月から2013年6月までボストン市のハーバード大学関連病院であるBrigham and Women's Hospital (BWH)に研究留学させていただきましたので、留学記をレポートさせていただきます。PIであったChiocca教授がBWHに就任されたため、留学途中でラボごとの引越しという貴重な体験ができました。Chiocca教授は、臨床と研究の両方を監督する大変忙しい立場にしながら、いつも笑顔が絶えず、大変人柄のよい方です。「論文のレビューが20件も机の上にたまっているよ、ハハハ」なんていうジョーク?も飛ばしながら、研究の進め方で困った時にはいつも時間を割いてくれ、適切なアドバイスをいただきました。本レポートでは皆様のまったく役に立たないであろう研究内容とオハイオ州のことは簡単に済ませ、ひょっとしたら興味のある方もいるであろうアメリカでの出産とボストンについてのレポートとしたいと思います。

まず初めに、研究に関して少しまじめなお話です。研究内容に関してはmicroRNAという翻訳されない小さなRNAが脳腫瘍の腫瘍化にどう関わっているのかについて興味を持ち、留学の研究テーマとさせていただいておりました。MicroRNAは遺伝の抑制的制御に関わっており、生物の発生段階における細胞の分化制御など、生物の根幹に関わる重要なdestiny factorとして存在していることがわかっており、現在では2000種類以上が同定されています。最近では、血中に浮遊するCirculating microRNAが新たな腫瘍マーカーとなりうるとして、注目されています。留学中には、当香



BWHのメイン研究棟。手前が旧館、奥が新館。合わせて28階建て分。その他にも病院内や周辺に研究所が点在している。

川大学脳神経外科教室の基幹テーマである薬剤耐性遺伝子研究に関わるmicroRNAや、ワーバーグ効果と呼ばれる腫瘍特異的な代謝経路に関わるmicroRNAについて研究を行っていました。どう頑張っても面白い話にはなりませんので詳細は割愛させていただきます。

次にあまり興味ないと思いますが、定例ですので、オハイオ州立大学のあるオハイオ州コロンバス市について、書かせていただきます。コロンバスは70万人都市で面積は高松の1.5倍程度と、人口密度としては高松とそれほど大きく変わらない街です。田舎好きの私にとってはボストンよりも住みよい街でした。Honda of Americaのお膝元でもあり、人口に比して日本人が多い街でもあります。実は私の父がホンダの社員でして、その関係で小学生のころに奇しくも同じ街に住んでいました。田宮教授よりコロンバスでの留学のお話をいただいた時には、運命的なものを感じました。渡米当初はそのときに家庭教師をしてくれていたアメリ



研究室のある建物。4階建てで建物は古いが、奥に見える動物実験などを行う11階建てのBiomedical Research Tower (BRT)と地下で行き来できる。

カ人の家に家族ごと住まわせてもらい、初期セットアップやその後の生活面においてその時の経験が2重にも3重にも助かりました。

それではアメリカでの出産のお話です。初めに、OSUでのお話です、とお断りしておきます。というのも、日本では考えられない話ですが、アメリカでは入っている健康保険のレベルに応じて受けられる医療が異なってきます。OSUでは比較的恵まれた健康保険に入ることができました。さて、本題ですが、第一子は我が香川大学での出産でしたので、いろいろな方面で日本との違いを経験することができました。アメリカでの出産を一言でいうならば、“あっさり”といったところです。例えば妊婦健診にしても、日本だと記念撮影サービスのように毎月エコーをしますが、アメリカの場合は妊娠初期のみに（産婦人科医ではなく）超音波技師と放射線科医が先天性疾患リスクの有無を診るために詳細なエコーを行うのみでした。産婦人科医は健診では問診と内診のみで、念のためドップラーで胎児の心音をチェック、という流れで、毎度の診察は5分程度で終わります。そしていよいよ陣痛が始まり病院へ行くと、まずは外来の別室で陣痛の間隔をチェックされ、合格するとやっと入院手続きが始ま

ります。陣痛間隔が5分以内になるまでは、病院に行っても本当にあっさり自宅へ帰されます。出産はほとんどが硬膜外麻酔による無痛分娩です。入院時にその是非を確認され、うちの嫁が断ると驚いていました。さらに子宮頸が全開になると人工破水させ、出産を促します（大抵はアメリカ流を受け入れようと思っていましたが、こればかりは本当に拒否しようかと迷いました）。第二子というのもあるかもしれませんが、破水からあつという間に30分で生まれました。出産後は2日で退院させられ、通常日本で1週間ぐらいかけて入院中に行われる新生児の診察・処置は退院後に、分娩後4日に満たない産褥婦を引き連れて、小児科の開業医に掛かります。紹介状などの関係で、退院する2日以内に小児科医を選定しておく必要があります、評判などを聞く暇もなく、自宅に一番近い医院に決まりました（予約も自分で電話します）。また、新生児の名前も日本のように退院後に子供の顔を見てじっくり2週間以内に決める、といったことができません。退院までに名前が決まらなると社会保障番号や日本の戸籍にあたる出生証明書の発行が遅れ、後々面倒なことになるので、アメリカでは出産前までに子供の名前を決めてしまうのが慣例のようです。このように、物事の流れがあつという間に過ぎていく、そんな印象でした。もうひとつ、出産後に驚かされた日本と違う点は、男



長崎に原爆を落としたB-29ボックスカー（実物）後ろにはゼロ戦が見える。オハイオ州デイトン（ライト兄弟の故郷）にあるアメリカ最大の空軍博物館にて。F-22ラプターも置いてありました。



スミソニアン航空博物館新館にて。スペースシャトル（本物）

児が生まれた際、出産翌日に包茎手術を勧められます。赤ん坊だと傷の痛みが（心の面でも？）少ないから、という理由で、白人の間では当たり前な選択肢だそう。そしてやはりアジア人は断る人が多いと主治医の先生が言っていました。

もちろんすべての事柄があつさりというわけではなく、アメリカでは子供のすり替えや誘拐が多いため、対策として産科病棟は完全な閉鎖病棟で、入棟時だけでなく、出棟時にもカメラの前で名前と用件を申告してから出入りします。新生児にはタグがつけられ、病棟外に連れ出したり、タグを外したりするとアラーム



ボストンChioccaラボグループ。最上段左がChiocca教授。中段左が私。医局Xmasパーティにて。

が鳴り、すぐに看護師と警備員がやってきます。退院時も閉鎖病棟からでて車に乗り込むまで担当看護師が付き添います。

最後にボストンのお話です。マサチューセッツ州の州都であるボストン市は高松の半分の面積で人口は60万人と圧倒的な大都市です。ボストンはアメリカで最も古い歴史を持つ都市の一つで、物価が高く（家族用アパートの家賃は月20万円から）、通勤は主に徒歩、バスまたは地下鉄であることなど、日本の京都と印象が重なります（実際、京都とは姉妹都市のようです）。オハイオで会う日本人はほとんどが企業の駐在員でしたが、ボストンは学術都市であり、ほとんどが留学生や研究生となっています。町全体に景観保護のため建物の建て替えが規制されており、いまでも古い町並みを楽しむことができます。また、海に接していることからロブスターなどを始めとした海産物がオハイオに比べ非常に手に入れやすく、この点も日本人が比較的生活しやすい土地柄の理由のようです。最近のボ

ストンの話題とといいますと、2013年4月にボストンマラソンで起こったテロかと思います。留学中のピザとハンバーガーですっかりデブデブになった自分を引き締めようと前日のプレース（たかだか5km）に出走いたしました。それでもやはり大観衆の前でゴールしたのは格別の想いと達成感があり、めったに更新しないFacebookなどに写真をあげて感激に浸っていた翌日にあの事件がおきました。自分が感動を味わったあのゴール地点であるような悲劇がおきたことに怒りを覚えました。そして数日後には全市民の外出禁止令が発令され、犯人は逮捕されました。普段は非常にうるさいボストン市内がシーンと静まり返っていたのが奇妙でした。

さて、最後にハーバード大学についてです。

ハーバード大学医学部は独自の病院を持っているため、現在17にも及ぶ市中病院と提携して各病院に教授職を設けています。このため、各病院で働くハーバード大学の肩書きと各病院の肩書きの両方が付いてきます。その中の3大病院に、マサチューセッツ総合病院（MGH）、私が所属していたBrigham and Women's Hospital（BWH）、そしてテロの容疑者も担ぎ込まれたBeth Israel Deaconess Medical Center（BIDMC）が含まれています。この3大病院の教授は他の14の病院組織のポジションも兼任することも多いようで、Chiocca教授の肩書はなんと6行に及んでいます。以前にそのあたりの組織図を講義していただきましたが、蜘蛛の巣を描いているような関係で複雑に提携しており、「政治や経済効率の末に落ち着いた格好なのだ」と、最後に笑っておられました。BWHでは1913年にCushing diseaseで有名なCushing先生が脳神経外科講座を開かれ、今年でちょうどその100周年にあたります。Cushing先生の功績として、北米に収縮期血圧をバイタルサインとして導入、初の脳のレントゲン撮影などがあるようですが、これらの初期的な臨床技術がやっと開発された時代にCushing病を下垂体の病気だと同定したのが同年代とはとても信じられませんでした。

ここには書ききれませんでした。日本にいては到底遭遇しえないこれからの糧となる経験をたくさんさせていただきました。今後は香川大学で研究を続け、未来の医療に役立てるよう頑張っていくつもりです。

以上、留学記レポートを終わります。最後に、留学にあたり、推薦いただきました田宮教授ならびに医局員の皆様、支援いただきました同窓会の皆様に厚く御礼申し上げます。今後の讃樹会の益々のご発展をお祈りいたしております。



ニューヨーク摩天楼の夜景

Zoom up

中学生を対象とした医師体験講座

「救急・脳神経系体験講座(人が倒れた時にすべきこと)」開催報告

中村 文洋 (平成7年卒)

同窓のみなさまにおかれましては益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。香川大学医学部では香川県医務国保課の依頼で医師体験講座を開催しております。中学生を対象とした救急・脳神経系体験講座は昨年24年度から開催し、今年度も平成25年12月28日土曜日に香川大学医学部臨床技能研修棟スキルラボラトリーにおいて開催いたしました。今回の内容は翌日の29日日曜日の読売新聞朝刊香川地域面でも紹介され、受講した中学生の感想などが掲載されました。香川県地域医療再生計画に基づく香川県医務国保課からの受託事業で、香川県内の医療施設で開催されています。中学生対象の冬休み企画として、県内各地から昨年度18名、今年度は17名お集りいただきました。指導者として、四国でご活躍されている日本救急医学会認定の資格を有する救命講習のインストラクター9名(医師3名、看護師2名、救急救命士3名、臨床工学技師1名)を招聘しました。

人が突然倒れた時に緊急度から考えるべきこととして、心停止および脳卒中などの救急疾患があります。これまで一般の方を対象に普及している救命講習会は、心停止に対する講習会のみでしたが、



座学(平成24年度)

人が倒れた原因が心停止

だけとは限りません。心

停止でない場合に、緊急度が高く多い疾患として脳卒中を取り上げ、

心停止および脳卒中に対する救命処置講習として開催しました。内容は、

胸骨圧迫(心臓マッサージ)およびACT-FAST(簡易脳卒中スケール)

を用いた脳卒中の判定方法など、実際に起こった場合に中学生でも

できる実習を行いました。

スキルラボラトリーのシミュレーターを用いたり、インストラクターが模擬患者を演じたりし、

臨場感あふれる実習となりました。受講後のアンケートでも、今回の講習を受けて将来の職業として医師を

含めた医療職を考えるようになった方が8割以上という回答でした。また、今回は中学生対象ということで、ご父兄のご見学もご案内したところ多数ご出席いただきました。家族参加型の講習会としても意義があったかと思えます。

このような機会をご提供いただきました香川県に感謝申し上げます。今後も地域連携として、このような学習の場を提供できたらと考えております。

このような機会をご提供いただきました香川県に感謝申し上げます。今後も地域連携として、このような学習の場を提供できたらと考えております。



簡易脳卒中スケール実習(平成25年度)



心肺蘇生実習(平成25年度)



最後の日だとしたら、今やろうとしている事は本当に自分がやりたい事だろうか？」衝撃的でした。僕はその頃から松下幸之助を始めとした会社経営者の著作を読むようになりました。また同時期に「社会イノベーター」と呼ばれる方達を知りました。彼らは、社会課題に対して革新的なビジネス手法で解決策を提供する実行者です。著名な会社経営者や社会イノベーターに共通して言えることは、ビジョンを掲げ情熱と行動力で社会や世界に挑戦している事でした。とても気分が高揚しました。僕のやりたいことは何だ？と考えた時、僕を含めて関係者全てがハッピーになりかつ社会課題解決に繋がる医療サービスを創る事になりました。

僕がその時疑問に感じていた事は、医師と患者の距離でした。地方の一般外来は高齢者が多く、車の運転が出来ない患者にとっては、病院に行くことは困難を極めます。バスと電車を乗り継いで1日がかかりで通う患者、タクシーでお金をかけてくる患者、仕事を休んだ家族に連れてきてもらう患者。診察室で待っているだけでは分からない患者のニーズがありました。解決策として思いついたのは、通院困難なお年寄りが多い地区に対して自宅近くの集会所まで医療者が赴く「巡回診療」サービスでした。調べてみますと、やはり規制があり、医者がいない地域（無医地区・準無医地区）でのみ認められていました。しかし、僕はとてもワクワクしました。なぜなら、今後地方は高齢化が深まり車を運転出来ない患者が増えて行く事、同時に人口減少が進み通院可能な診療所の数も減っていく事から、無医地区は日本の最先端だと考えたからです。

僕は2012年7月に大学院を中退し、無医地区・準無医地区の視察と自治体との交渉を始めました。関東、東北の幾つかの自治体にあたりましたが、様々な理由で話が進む事はありませんでした。2013年4月、途方に暮れていたところ、あるご縁で栃木県益子町の町長様と繋がり、町内唯一の診療所の医師が引退され無医地区となった田野村の事を伺いました。

さっそく田野へ向かうと、4km×8km程の面積（香川大医学部からだ横は「しんせい」、縦は「谷川」位の距離です）、人口5000人、閉鎖した診療所の隣には野菜の直売場があり、近くに幼稚園と小中学校があります。のどかな蕎麦畑の中を少し走ると、釣りの出来るダムもありました。一方で、路線バスや鉄道は地区内になく、車が運転出来なくなった患者にとって一番近くの診療所へ行くのは1日かかり、電動三輪車で1時間かけて通院する90歳の女性もいました。今後、高齢化が深まる地域では、在宅と外来の隙間を埋める医療モデルが必要になる。ここで「巡回診療」という医療スタイルに挑戦しよう！と心に決めた瞬間でした。

まずは閉院した診療所を2013年9月に再開し、週

3回の一般外来を開始しました。そして診療所を拠点として巡回診療を開始するべく益子町行政、厚労省、厚生局、保健所、県行政、医師会の先生方と交渉や調整を行いました。その結果、益子町



にない眼科に限ってなら田野地区での巡回診療が許可される方向で話が進んでいます。まだ、医療安全の問題や周辺地域の医療資源との調整などハードルは多いですが、励みは田野地区住民の過半数の2500人が巡回診療を希望していること、益子町行政が応援してくれる事、都市部の眼科医や周辺地域の眼科開業医の先生が協力したいと申し出てくれている事です。まだまだ山登りで言うと登山道入り口へ差し掛かった所ですが、2014年中の実現、持続可能なモデルの確立へ向けて益々情熱を持って、誠実に励んで行く所存です。

最後に、約1年前に活動し始めてから様々な母校のご縁が自分を支えてくれています。いつも温かくお声かけ下さる関東同窓会会長の伊藤理先生、伊藤美奈子先生ご夫妻、このような機会を与えて下さった中村丈洋広報局長、10年ぶりの再会にもかかわらず激励をくれる学生時代の先輩・同期・後輩を始め全てのご縁に感謝しております。

PS：僕達の活動に興味のある方、またこれまでにない医療サービスを考えている方は是非ともご連絡下さい。何かの形で協力出来るかもしれません。

2013年12月31日

どこでもクリニック益子 池ノ谷紘平
(平成17年卒)

栃木県芳賀郡益子町大字長堤574-1
ikenoya@docodemo.or.jp

興味深いと思われた方は「いいね！」お願いします。
<https://www.facebook.com/iryoshinkokai>

診療所周辺の風景

「創部ものがたり」

～硬式庭球部編～

ゼロからのスタート

今を去ること約34年前の昭和55年4月、香川医科大学への入学式を終えた我々第一期生は、当時唯一の建造物であった基礎講義棟のラウンジにたむろしつつ、さてどのような課外活動に励むかと思いを巡らせておりました。ひっぱりだこであるはずの我々新入生に対する各部からの勧誘活動というものは当然そこにはなく、どのような経緯で硬式庭球部が形成されていったのか今となってはよく思い出せないのですが、当時はやりのテニスでもやってみようかと考えていた者たちが三々五々集まり、テニス部でも作ってみる？って感じで自然発生したものと思われまふ。その中にはゴリゴリの体育会系を目指す人、同好会的志向の人、またファッション系の人（当時テニスは若干トレンドでもあり、使いもしないテニスラケットを小脇に抱えた人たちが歩いていた）など、目的の異なる各人種が混在した状態でした。私はとて言えば、野球等の団体競技は当然最初から1チーム分の人数が集まるわけもないので、とりあえず手っ取り早くゲームができそうなテニスを選んだのでした。

まあそんなこんなで希望者がとりあえず集合することになったのですが、開学当初はテニスコートの完成が間に合っておらず、集合場所はようやくアスファルト舗装がなされた体育館横の（体育館もまだありませんでしたが）駐車場でした。さしあたり集まったメンバーで、ネットもない駐車場で球を打つ真似事を始めてはみたものの、そこにあるのは相当な残念感と寂寥感でした。見かねた学生課の方が、あまり使われていなかった屋島の香川大学テニスコートを貸してもらえようようお願いして下さり、何度かそこまで遠征したりもしました。そうこうしているうちにハードコート3面が完成、とりあえず庭球部らしき体が整いました。

部員の中に硬式テニス経験者は1-2名、軟式テニス経験者が数名といった状態で、教える者もおらず、フォームからラケット、ウェアまで何かと個性にあふれたマッケンローやボルグやエバートたちがとりあえず自由気ままに活動している状態でした。

それでも身のほど知らずなことに1年目から中四国、西医体には参加を決定、所詮医学部の運動会だろう、みたいなノリで参加した我がチームはそこでいろんな意味で衝撃を受けるとともにお勉強させて頂くはめになりました。

まず試合前にメンバー表交換という儀式があることも知らず、あわてた我々は急遽何とか入手した便箋にメンバーを記し（当然全員レギュラーメンバー）、押すべき部印などあるはずもなく、代わりにキャプテン名のシャチハタを押印し交換、相手チームのやや呆れた様子を感じながら急ごしらえの円陣などを組み、いたく恥じ入ったものでした。結果はここに記すまでもなく、連日昼の弁当の時間には試合終了している我々でした。

ここでたっぷりと恥をかき、このままではいかんとその後は徐々に体育会系に純化する一方で、同好会的志向の人たちは別の道を歩むことになって行きました。以後は外部から一時コーチに来て頂いたり、高知医大、香川大学等を手始めに定期戦の設定、クレコートになじむため県テニス協会主催大会への参加など、考えられる事のすべてをがむしゃらにやり続けました。それでもなかなか結果は出ませんでした。6年目の夏にようやく念願の西医体で一回戦勝利する事ができたことは我々の何よりの思い出となっています。

今でも現役部員の方がご丁寧に最近の立派な戦績を報告して下さいますが、我々の時代とは隔世の感が

あるなあと敬服し拝見しております。
でもテニスにかけていた情熱は多分
同じはず、とだけは仲間たちの名誉
のため記しておきます。

今後の硬式庭球部の皆さんの益々
のご活躍を願って止みません。

平成25年12月31日

おもろまちメディカルセンター
岩佐綱三（昭和61年卒）



祝一期生卒業（筆者 右から3人目）



昭和60年西医体男子初勝利



※今号から新企画、シリーズ「創部ものがたり」が始まりました。

香川医科大学は開講30年を過ぎました。現在、医学部には学生サークルが文化系10、体育系20、文化系同好会7、体育系同好会2と、30部近くあり、充実した学生生活を支えています。歴史は積み重なり、知らず知らずのうちに部員数も増え、今や揺るぎないサークルとして存在していますが、何にでも始まりがあります。

大学開講当時の、サークル活動の第一歩が始まった頃を回顧していただくのがこのシリーズで、時代感満載です。

まずは、硬式庭球部からタイムスリップしていただきました。

「10年後の私」の10年後

さらなる10年後の未来のため



香川県済生会病院

岩藤 泰慶 (平成8年卒)

この度、「『10年後の私』の10年後」というテーマをいただきました。「10年後の私」を書いてから、あたりまえですが、すでに10年が経過しているということに驚きました。年齢とともに年月が過ぎ去るのが早いことを実感しているところです。さて現在の状況ですが平成25年4月に香川大学医学部附属病院より香川県済生会病院へ転勤となりました。役職は驚きの循環器内科、副院長です。当然10年前に現在の状況は全く予測できず隔世の感を禁じ得ないです。この10年間基本的に香川大学医学部附属病院を中心に仕事をしてきており、専門分野も循環器内科領域でもめずらしいポジトロン断層検査（PET検査）を含む心臓核医学領域を専らとしていました。病棟医長として入退院等病棟の管理や研修医への指導や、海外を含む学会発表を行う等忙しい10年間でした。一緒に働いていた先輩、後輩方たちも、大学から一般病院の勤務に変わったり、実家の病院をついだり、新規に開業したり、あるいは研究専門への道を歩んだりと様々な方面に進路を定めていくのを見てみると、忙しさにかまけていたこともありますが、正直、自分の将来等については五里霧中の状態で、選択肢の幅が大きく、いろいろな可能性のみが大きく見えて実際には決めかねて迷っている状態でした。それだけに10年後の現在の状況は我ながら信じられない状態です。

現在香川県済生会病院に移ってまだ半年ですが、仕事内容はかなり変わりました。外来をして、救急対応をして、検査をしてといった循環器内科医としての業務は変わりませんが、病院経営という分野も考えなくてはならなくなりました。現在の厳しい医療情勢のなか、病院の生き残りは大変厳しく、きちんとした経理の知識や人事の把握（院内での各部門、職種毎の配置、

人材の確保等）、医療コスト、収益の個別把握が必要で、その上でこれからの病院の進むべき方向性への提言といった管理業務の増大があり、一個人医師として循環器領域のことだけ発言していればよかったときと比べると非常に気苦労が多くなってしまいました。また済生会は全国組織であり、ついこの間も済生会学会が東京で開かれましたが、参加者がすべて済生会の関係者ばかりというのも驚きますが、済生会は恩賜財団でありその総裁は今年より、なんと秋篠宮殿下下であり、済生会学会総会や帝国ホテル懇親会にもご出席されており、すぐ近くで拝見することができました。なかなか普通では得難い経験ではありますが改めて自分の所属する組織の大きさとそれに伴う自分の責任の重さを実感することとなりました。

これからの10年間を想像するにあたり現時点では10年後も香川県済生会病院で勤務をつづけ、病院管理というか経営についてさらに勉強したうえで、済生会病院のさらなる発展のため仕事を続ける私がおっとも考えやすいですが、それ以外にも今回の経験を活かし、医院開業等自分がトップとなり組織を作り上げ進めていく私、全く別の病院に移り病院経営からは外れて医療のことのみ考える、ゆったりとした余生を過ごす私も考えられます。しかしながら10年前よりは選択肢の幅が狭くなってきているのを感じますので、これからの10年後、20年後のために、自分がいる状況で自分ができる最大限のことを行っていくのみならず、なるべく将来の選択肢を広げることができるよう、これまで以上に新しいことに積極的に挑戦していき、なるべくたくさんの経験を積み、10年後に自分がどうなっているか楽しみにできるように努力していきたいと考えます。



香川医科大学医師会会報 平成13年11月発行第13号誌より転載

10年未来の私

第二内科 岩藤 泰慶

この度、「十年後の私は」というテーマをいただきました。いま、私は大学を卒業して、まだ6年目です。6年しかたっていませんが、現在の私は、卒業時に思い描いた医師のすがたとはだいぶかけ離れたものになっています。卒業当時、とりあえず心臓を専門にしていこうとは決めていましたが、それは臨床医として働いていくことであり、研究は学位をいただければいいとしか考えていませんでした。しかし、研修医として臨床の現場を目の当たりにすると、実際に診断、治療をすすめていく上で、正確な診断をすると言うことがとても難しく、また、特に心臓の分野では、新しい治療法もどんどん開発され、医学もまだ発展途上にありどんどん進化していくことを知りました。

このため、徐々に、臨床の現場において曖昧なこと、解明されていないことを大学院生として研究をしていきたいと考えるようになりました。大学院生の時、心エコーと心臓核医学の臨床研究を行っていくうちに、興味は心臓核医学へと向かいました。

一般的に用いられている核医学検査は、単に人体の構造だけでなく、生体内の局所の代謝が画像で把握できるため、非常に有用ではあります。しかし、世界にはポジトロン断層検査（PET）というさらに精密な検査方法が開発されており（この度香川医大にも導入され順調に機械の設定がすめば来年の春以降稼働し始めますが）、日本ではまだ約40カ所しか導入されていません。それを用いると、心臓の機能についてさらに詳しく検査できるということを知り、この分野についてもう少し学びたいと考えるようになりました。この後、幸いにも北海道大学核医学講座に国内留学させていただき、PETについて学ぶチャンスに恵まれました。このため、幸運なことにも北海道大学で学んだ知識がここ香川医科大学で活かせることになり、思いもしなかった展開に自分自身が一番驚いています。

そのため、10年後の自分がなにをしているのか？と考えると、大学に残ってこのままPETの研究を続けて、いろいろな場所で研究成果を発表して行く私、またPET検査そのものが臨床上欠くべからざる検査法として確立し臨床医として働く私、もしくは医者以外の道も含め全く別のことを行っている私、等々、様々な可能性が開けていることを実感しているところです。10年後の私がどうなっているのか？そのこと自体に私は今一番強く興味を感じており、どうなるのが楽しみです。

～明るく楽しく生きていくことを目指して～

香川大学医学部精神科神経科

熊 宏美 (H12年卒)

今回この原稿の依頼を受けた時に、10年前に書いた、「10年後の私」の記事を読み返しました。当時の私は大学院生で、長女を出産した直後。忙しくも充実した毎日を過ごしていました。そして、その時の原稿に私は、10年後に対して3つの希望を書いていました。一つ目が、精神科医として働いていること、二つ目は何か研究を続けていること、三つ目は子どもの数が増えていること。一応、すべて達成されていると思います。私は今も精神科医として仕事を続けていますし、学会発表もときどきさせてもらっていますし、子どもは二人に増えました。10年前の私に、何とか合格点をもたらるのではないかと思います。

私にとってこの10年は、とても大変な10年でした。まず、尊敬していた父親を亡くしました。それから、離婚を経験しました。そういう意味では、大切な人との離別を経験した10年でした。そのことが仕事にも家庭にも大きく影響しました。自分自身を守ってくれる人を失ったような感覚になり、まずは自立をしなければならぬ、と強く感じるようになりました。一人でもちゃんと生きていけるようになりたい、それから、自分自身と子どもが不幸だと感じないように、明るく楽しく生きていきたい、その二つの思いが、今日までの私を支えてくれたように思います。

子どもが幼稚園までの間は、研修会や学会に子どもを連れて行くことも多々ありました。当時の私は、ちょっと無理をしても、資格をきちんと取りたいという思いを強く持っていました。東京のような都会は、週末の一時預かりの託児所が充実していてとても便利です。それでも最初は知らないところに子どもを預けることにとても不安を感じ、そうまでして資格を取ることが本当に必要か悩んだ時期もありました。幸い子どもたちはたくさんの人にかわいがられ、いろんなところを旅したので今ではすっかり旅慣れた子どもたちになっていますし、そうして子どもたちと過ごした時間が、とてもいい思い出になっています。そして、そうまでして取った資格は、今の私の臨床力にどれくらい影響しているのか、正直自分でも分からないことありますが、頑張った証として私を支えてくれているように感じます。

家庭では、物の整理に取り組むようになりました。それまでの家のなかは本当に散らかっていたのですが、とにかくものを捨てて片付けをするという日々がしばらく続きました。いらなくなったものを捨てることで、自分にとって、本当に必要なものは何なのか、それを

自分に問いかける習慣が身に付いたように思います。振り返るとこの10年は、本当に一生懸命やってきました。今年になってやっと、自分自身が少し落ち着いてきたような感じがしています。仕事の面でも、ひたすら外来で患者さんの話を聞き続けてきましたが、少しずつ、もっと外へと仕事を広げていきたいと感じるようになってきました。香川県精神医療審査会の仕事で他の病院へ行ったり、役場で心の健康相談の担当をしたり、保健所で講演を試みたり、今までと違った仕事をする機会が増えて、これからは自分が身につけてきたことを少しずつ周りに伝えていけるようになるという気持ちでいます。院内でも、摂食障害の入院カンファレンスを立ち上げ、緩和ケア回診にも参加させていただくようになり、また外勤でも高松赤十字病院でリエゾンを担当するようになって、他の先生やスタッフの方たちと一緒に患者さんを診させていただく機会も少しずつ増えてきています。自立を目指していた私が改めて、いろんな人と助け合いながら仕事をしていく大切さや楽しさを少しずつ感じていることは、とても面白いと思います。生活の面でも、今までのある意味肩に力が入った生活ではなく、もっと自然な気持ちで過ごしていけるようになっていきたいと感じています。

次の10年後の私に希望することは、子どもたちに恥じない私になっていること。周りの人たちを助けていくこと、それから助けられることを受け入れること。それから、やっぱり明るく楽しく生きていきたい、そう思います。



香川医科大学医師会会報 平成15年1月号(第14号誌)から転載

10年前、現在、10年後

精神神経科 熊 宏美

10年後の自分を想像するにあたって、まず10年前の自分を振り返ってみました。10年前といえば高校生。ちょうど先日、大学の高校訪問に卒業生ということで参加させていただき、久しぶりに母校を訪ねる機会を得ました。その説明会には高校1、2年生が主に参加しており、最近の若い人は(私もまだ「若い人」と言える立場かどうかは疑問ですが)将来のことを早くから考えているものだな、と感心させられました。自分の高校時代を振り返ると、とりあえず勉強は嫌いではなかったのですが、将来研究者にでもなれたらな…程度のことしか思っていませんでした(家事はとにかく苦手だったので必ず働こうとは思っていましたが)。結局3年生の、しかもセンター試験が終わった直後くらいにやっと、「医学部なら研究もできるし、研究が嫌になったら医者として働けばいいからつぶしがきくだろう」という考えで香川医科大学を受験することとなりました。

しかし大学1年生の時、大平 健先生の著書「豊かさの精神病理」を読み、患者さんの話をじっくり聴き、何回も回数を重ねて徐々に行っていく治療があるということに衝撃を受け、私の興味は研究から臨床へと大きく変化しました。ポリクリで精神科に来たときに、ゆっくりと丁寧な患者さん一人一人に話しかけながら回診が行われているのを見て、臨床をするなら精神科にしようかと心に決めました。卒業試験の頃まで研究(基礎系)に進むか臨床をするかも正直迷いましたが、中間策的に精神科の大学院に進むことにしました。

現在私は大学院3年生、精神科で1年間研修をした後、神経機能形態学教室で研究させてもらっています。1年間の研修は思った以上に大変で忙しく正直つらい思いもしましたが、全体を通して仕事は楽しく、そして患者さんが元気になって退院していくのを見送る度に、これから先も臨床をしようという思いが強くなっていきました。しかしながら昔からの研究をしたいという思いもあり、将来は臨床をしながら何か研究ができるといいな、と考えるようになりました。大学院の間に研究とはどういうものを学び、そのことを将来活かしていきたい…という意気込みで臨んだ研究生活でしたが、昨年結婚し、今年の7月に長女を出産、産休を頂いてしまい少し予定が狂いつつあります。幸いなことに同居している義父母が子供の面倒をみてくれ(半ば確信犯)、また妊娠中から温かく理解、支援して下さった精神神経科、神経機能形態学教室の先生方のおかげをもちまして(この場を借りてお礼申し上げます)、産後2ヶ月で研究に復帰できました。これからは産休中の遅れを取り戻す勢いで頑張りたい…と思っておりますが、体がなかなかついてこれず、今後も研究・仕事と家庭・育児の両立にしばらく苦戦しそうです。

高校時代からこの10年間でずいぶんと私自身の考え、家族や社会の状況などが大きく変わりましたが、「研究をしたい」という大まかな希望はかなっていることになります。これから10年後なんて、本当にどうなっているのか自分自身でも想像できないというのが本音です。しかし希望としては①今と同じように周りの方々(家族や職場の人々)にご迷惑をかけながらもなんとかどこかで精神科医として働いている、②細々とでも何か研究を続けている、③子供の数は増えているが長女がお姉ちゃんとして頑張ってくれている、この3つがあります。10年後の私も、忙しくも楽しい日々を過ごしていますように…。



追 悼

古谷 保人先生(平成2年卒)を偲ぶ



平成25年7月19日、古谷保人先生がご逝去されました。かねてより胃癌で闘病されていたそうです。讃樹會事務局から訃報の連絡を受けたのが、10月22日でした。したがって、ご葬儀に参列することはできませんでしたが、11月2日、ご実家にお伺いさせて頂きました。

ご遺影を拝見し、ご逝去を実感すると哀しみと淋しさがこみ上げてきました。お母様とお姉様のお話では、旅立つ直前まで担当患者のことを気にかけておられたそうです。歩けなくなったため車椅子で、痛みと闘いながら往診に赴かれたというお話を伺い、つらさを通り越して古谷さん(いつもの呼び方にします)の偉大さに圧倒される気持ちになりました。私は真似できません。とにかく優しい人柄をお持ちでしたが、それだけでなく内に秘めた力強さも感じさせる方でした。

古谷さんとはいろいろな思い出があります。

学籍番号が近かったこともあり、入学当時から話す機会も多くありました。共通一次(現“センター試験”)の語学の選択でフランス語を選んだということを聞いて、いきなりびっくりさせられました。どれだけ優秀な人なのだろうと後ずさりしたものです。最初の印象どおり、授業では毎回、最前列に座って真剣に聴講し、終了時には必ず質問していました。対して不良学生である私は最後列に座って事あるたびに脱出を図り、出席を取らない授業は殆どさぼっていました。大きな差です。平成2年卒業の方は卒業アルバムをご覧下さい。授業中の写真でその様子が見受けられます。

臨床実習では同じ班に属していました。実習が始まる前は私のような不出来な者と一緒に迷惑だろうと心配していました。しかし、嫌がるどころか優しく接して下さり、勉強もかなり教えて頂きました。私が卒業できたこと、医師になれたことは古谷さんのおかげだと思っています。

軽音楽部でも一緒でした。バンドは別だったものの、古谷さんのギターテクニックは素晴らしく、とても勉強になりました。複雑な指捌きで独創的なメロディーを奏でながら歌うという離れ業は、当時の部員の中でもできる人はごくわずかでした。作詞もできました。頭脳明晰であるだけでなく、芸術家でもあったわけです。

卒後数年で他県に転勤されて以来、会う機会がありませんでした。将来、私が古谷さんの元に行った時には一緒に演奏したいものです。ですから敢えてお別れの言葉ではなく、感謝の気持ちだけお伝えしたいと思います。

古谷さん、本当にありがとうございました。

ご冥福をお祈りいたします。

藤村 貴志(平成2年卒)



『卒業生謝恩会での演奏』



「人間五十年、
下天のちを比ぶれば、夢幻の如くなり。」

ひとたび牛を得て
滅せぬものあるべきか」

仮面ライダーを愛し、ギターを愛し、バイクを愛した古谷先生は、平成25年7月19日に50歳の短すぎる生涯を終え、天に召されました。

当院では内科医師として主に介護療養型を統括されていました。スタッフへの物腰も柔らかく、家族からの受けもよい最高の医師でした。特に痛みを感じさせないインフルエンザの予防接種が大人気で、職員がシーズンになると列を成して、先生の注射を受ける光景を目にしていました。

先生は84年次入学、私が94年次入学ですので、学生時代の接点は無かったにもかかわらず、香川医大の後輩として色々と可愛がって下さり、時には厳しい助言もして下さるなど、本当に素晴らしい先輩でした。普段は寡黙な先生も、音楽のことになる生き生きと子供の様に目を輝かせて、身振り手振りで熱く語られる方でした。私も先生と音楽の趣味が一致していたこともあり、時間を忘れて音楽談義に花を咲かせたことも良い思い出です。ギターの演奏も拝聴いたしましたが、かなりの腕前だったと記憶しています。また熱烈なる仮面ライダーマニアで、先生のお部屋には至る所に仮面ライダーのフィギアが並べられていました。

仮面ライダー好きだからというわけではないでしょうが、先生はツーリングが好きな方でした。職員と共に色々な場所に行かれていました。4年ほど前に転倒され、脛骨を骨折されました。2年前にも転倒され骨折。1年前にも転倒して骨折し、創部の2次感染を起こし、この時は1ヶ月休職されました。先生は、長年吸収不良症候群を患っていらっしゃったため、骨折の回復が健常人に比べはるかに時間がかかる方でした。私は先生に「バイクに乗るのを止めて下さい。見てるこちらがハラハラします。」と伝えました。先生はし



ばらく考えた後「わかりました。」と答えられ、それからは車で出勤されるようになりました。しかし職員から隠れてバイクには乗り続けていらっしゃると聞き、ツーリング仲間である職員に、なんとかバイクを止めるように説得してくれないかと持ちかけたところ、職員からは既に何度も説得しているが、「人間50年」と言われて聞く耳を持たず、ツーリング先で転倒し血だらけになっても、全く意に介していないとの言葉が返ってきました。その時は、微塵もその身体を病魔が侵していたとは考えませんでした。

別れの日には突然やってきました。外来業務を行っている途中に、事務職員から「古谷先生から体調が優れないので、家まで迎えに来て欲しいと連絡があり、今迎えに行っています。」と報告を受けました。当院は精神科単科病院であり、そんなに身体状況が悪いのであれば、かかりつけの総合病院を受診の方が最善と考え、「そのまま当院ではなく、総合病院へ連れて行って下さい。」と指示を出しました。しかし、先生が頑なに当院へ来ることを希望したため、そのまま外来に先生は運ばれてきました。顔面は蒼白で、苦痛に顔を歪めている先生を一目見、当院では全く対応できない状況であると認識し、「紹介状を書くので、総合病院へ行ってください」とお願いしたら、しぶしぶ総合病院受診を納得して下さいました。そして、そのまま総合病院へ入院となりました。入院後3日目に、危険な状態であるとの連絡を受け、病室に駆けつけると、先生は酸素マスクをつけ、苦しそうに横になっていらっしゃいました。私の顔を見るなり「すみません、迷惑かけて・・・」とかすれた声を出されたので、私は「心配いらないです。それよりもゆっくり養生してください。」と声をかけました。そうすると先生は静かに目を閉じられました。その後病室の外で家族から、末期の胃癌と聞かされ、その日の夜遅く先生は旅立たれました。

通夜の席で、先生のお姉さまから、その苛烈な人生を聞きました。ずっと苦しんでいらしたことも聞きました。ご家族にも「人生50年、今を精一杯生きる」と常々話されていたとも聞きました。そして、当院で働くこと、当院での人間関係をすごく好いていらしたことも聞きました。私はその話を聞きながら涙が止まりませんでした。

先生、先生が亡くなる前に家族のもとではなく、なぜ職場を訪れたのか、私には本当の理由は分かりません。でも、先生が好きだった病院、職員はこれからも守り続けていきたいと思えます。甚だ微力な自分の力では自信が無いので、あの世から見守っていて下さい。あっ、そうそう、あっちで一緒にバンドを組みましょう。その時にでも本当の理由を教えてください。心よりご冥福をお祈りいたします。ありがとうございました。



大西 英周
(新しいずみ病院 院長・平成13年卒)

支部会・懇親会

香川医科大学平成元年卒業生同窓会の開催報告

平川 ふみ (第4期生・平成元年卒)

平成25年9月7日(土)にJRホテルクレメント高松にて第4期生を中心とした平成元年卒業生の同窓会が開かれました。この期の同窓会は4年に1度、オリンピックイヤーの翌年に開催することが決まっております、今回で6回目です。

第1回目こそある程度の人数が集まったものの、年々参加人数は減少し、業を煮やした幹事役の佐藤清人君から「女子の集まりやすい日を選んで、君たちが決めてくれ」と指令が下り、たまたまグルメの会で集まっていた女子6人で「私たちは9月の第1週の土曜しか空いていない」という独断でこの日に決定したのが、ちょうど1年前。以来地道にメールなどでも告知し、当日26名の参加をみることができました。

当日は夕方6時からの開催でしたが、30分前より懐かしい顔が集まりだし、中には卒業以来の再会を果たす人々も。皆な学生時代と全く印象が変わっていないのには驚きです。本当にみなさん、若々しい。女子が集まればキャーキャーと賑やかなのは相変わらずです。幹事代表の佐藤君の挨拶から、いよいよ会は始まりました。美味しい料理とお酒を前に、各テーブル話が弾みます。一気に学生時代の、皆で過ごした懐かしい時間がよみがえってきます。「そう言えばあの時のあれは〜」「実は〜」など今だから話せる暴露話もあり大笑いです。

会も終盤にはいり、一人一人近況報告をしてもらいました。院長や部長など病院の要職につき奮闘している人、開業し地域に根差した医療を目指す頑張っている人、子育てや家庭と両立しながらもバリバリと仕



(左から)

後列：北条聡子、上枝宏和、清水誠英、佐藤清人、大西聡、寺井祐司、大西隆行、井上慎二、杉田英樹、篠原豊彦

中列：合田(吉田)真由美、白川敦子、佐伯圭介、井上(川原)佐知子、田中宏実、佐々木潔、林栄一、松本義人、喜田智幸、藤原史利

前列：平川(奥田)ふみ、明渡(田中)郁子、三好彩、田中あゆみ、田中宝くん、石井すみれちゃん、石井(照下)真美、松下章子

事をこなしている人、みんな医師という仕事に誇りを持ち頑張っている姿がありました。と同時に、週末にはグルメや旅行、コンサートに舞台鑑賞、野球やテニス、エアロビにフラメンコなど趣味や体力作りにも励んでおり、まさに仕事も遊びも充実していることがうかがえました。これが、いつまでも若さを保つ秘訣なのかと納得もしました。同期生がアクティブに活動し頑張っていることを知ると、刺激にもなりますし元氣や氣力ももらえるような気がしてきます。

一次会終了後もほぼ全員が二次会へとなだれ込み、いろいろと語り合いました。

話は尽きませんでしたが、また4年後元気に会おう、と再会を約束し名残を惜しみつつ別れました。

今回残念ながら参加できなかった同期の皆さん、次回平成29年の同窓会でお会いしましょう。



第1回 讃樹會 外科医の集い 「母校という宿命と絆」

香川大学消化器外科 西澤 祐吏 (H14年卒)

卒業以後、色々な施設で研鑽を積んできたが、事あるごとに出身校を尋ねられる。母校には愛着があり、誇りに思っているが、有名大学と横並びにされた時の心もとない感覚を味わったことがあるのも事実である。母校を思う気持ちは、学生の時には感じたことが無かったと思うが、医者を経験年数が増すに従って、強くなっている気がする。同郷の芸能人を応援するのと同じで、同窓の先生が活躍する話題には、いつも心躍る感じがある。香川大学医学部で学び、今があることは同窓の力強い共通点であり、変えられない宿命でもある。少しでも後輩の心を躍らせることのできる仕事ができれば、きっとその後輩もそれが励みになって頑張れるだろうと思って自分を奮い立たせることがある。同窓というつながりは、想像以上に強い力を持っていると感じている。

今回の集いは、ある経験がきっかけとなって計画が始まった。今まで、このような専門分野で集まる同窓会は例が無かった。今回ご参加いただいた、大阪大学消化器外科の助教としてご活躍されている畑泰司先生(H9年卒)とは、学生時代の交流は全くなかったが、手術見学で大阪大学にお世話になった時に、不意に声をかけてくださった。全く同窓の先生が、出迎えてく

れることを想定していなかったが、アウェイに一人で乗り込んでいったときの心細さが、一気に解消された。そこからは、初めて話をする間柄とは思えない、友好的な時間を過ごさせていただいた。その時、現在所属している施設や組織の壁を越えた絆を感じることができた。こんな絆が同じ分野で仕事をしている同窓の中に眠っているだろうと想像し、外科医の集いを開催することになった。

連絡が遅くなったことや、例を見ない会であることなどで、参加者は12名と少なかったが、大学時代の話から現在の診療に至るまで、世代と組織を越えた話をすることができた。

食道癌手術治療でご活躍の大阪市立大学消化器外科の李栄柱先生(H4年卒)も参加してくださったが、この時に当科の藤原理朗先生(H9年卒)と手術に関する会話をしたことから、李先生が当科の食道癌手術に、手術指導に来てくださることが決まった。つい先日、その手術が執り行われ、有意義な手術指導となった。これは当科にとっても光栄な出来事であったが、李先生自身も母校で手術ができることをとても喜んでくださった。

今後このような母校の絆によって、組織の垣根を

こえた交流が盛んになることを望んでいる。個々が頑張って活躍することで、宿命は財産に変わっていき、さらに同窓の活躍につながると思う。今後も数年ごとの外科医の集いを約束して、宴は終了した。次回は、さらに多くの外科医が集まることを楽しみにしている。



後列：西澤祐吏、藤原理朗、萩池昌信、畑泰司、竹林隆介、横山雄一郎
前列：出石邦彦、李栄柱、小林裕之、吉鷹秀範、岡野圭一



平成7年入学生、平成13年卒業生(16期生)同窓会報告

岸野 毅日人 (平成13年卒)

讃樹會会員の皆様、こんにちは。去る2013年12月22日、リーガホテル高松に於いて、平成7年入学生と、平成13年卒業生の同窓会が開催されました。

そもそものきっかけは、佐野君となべさん(渡辺秀樹さん)の間で、「そろそろ同窓会したいねー」といった話が出たことだそうです。外科の学会で盛り上がったのでしょうか。その後、佐野君から美晴ちゃんにその話が伝わり、6月下旬に西庄さんから「同窓会やりましょう」メールが届いた、という次第です。

幹事は美晴ちゃん(旧姓藤本美晴さん、本原稿の校正・加筆担当)、西庄さん、伊地知さん、修さん(中村君)、中野君、岸野(本原稿担当)で役割分担をしました。同窓生の居場所をつかむ作業幹事メンバーで分担しました(意外に大変でした)。案内状の発送・返事のとりにまとめ、参加者の窓口は美晴ちゃん・伊地知さん、会場との交渉は西庄さん、当日の進行は中野君、会計は美晴ちゃん・西庄さん、託児室の準備は美晴ちゃん、幹事代表は修さんが主にやってくれました。重責を担って頂いた方々に、改めて感謝致します。

当日はやや寒かったものの天候に恵まれ、リーガホテル3階の翡翠の間には43名の同級生と6名の子供が集まりました。北は北海道、南は沖縄からの参加で、まさに日本全国で活躍する同窓生の大集合となりました。受付では、学生時代と変わらない面影の女性陣が受付業務をしていていました。

3時半頃に、まず集合者全員の集合写真を撮影しました。その後、事務局長の美晴ちゃん、当日係の中野君のあいさつの後、乾杯となりました。しばらくの歓談の後に、一人一言ずつの自己紹介がありました。男性の参加者は、病院勤務医をしている人が多く、田岡君と竹中君と池田君が留学中とのことでした。女性の参加者は、バリバリ勤務医をしている人、結婚し休職して子育てをしている人など様々でした。休職中の人

も、「そろそろ復帰を」と考えている人、考えていない人、いろいろあるようです。復帰を考えている人に向けて、女性医師支援関係の仕事をしている方からの応援もありました。

卒後12年ほど経ち、夜中までの手術が日常茶飯事の人、当直明けで会に参加してくれた人、離婚のごたごたを乗り越え幸せをつかみとり、iPS研究所で勤務している人、留学を考えている人、アンチエイジングに燃えている人、開業した人など、それぞれの人生が垣間見えたひとときでした。在学中から個性的なメンバーが集まった学年でしたが、今も変わらず各々の個性を生かして人生を謳歌している様子を互いに知ることができた実りある会となりました。

余談ですが、私には子供が4人(全員男)おります。驚いたことに、大谷君と三木さん(旧姓都甲さん)のところも子供が4人いるそうです。今時、4人もいる子沢山はうちだけだと思っていたのですが、三木さんからは、「3人も4人も一緒だよー」という励ましの言葉を頂きました。三木さんのところは一番上の子が11才で、一番下の子が泣くとすぐにあやしに行ってくれるとのこと。うちの一番上の子は6才で、2番目(4才)とつるんで遊んでばかりです。あと5年辛抱します。やや個人的な感想でしたが、少子化の時世に、立派に社会貢献している人が少なくないことが嬉しかったので追記しておきます。

最後に、幹事代表の中村修さんからのあいさつがあり、ラグビー部伝統の万歳三唱で幕を閉じました。「16期生、ばんざーい!!」という、聞いたこともない修さんの大きな声が、今でも頭の中をこだましています。

18時前に1次会が閉幕し、集合写真を参加者に渡した後、クリスマス前で華やかな雰囲気の兵庫町・丸亀町商店街を抜け、「高松も変わったねー」という話を





最上段：石井、岡添、大谷、竹林
 2段目：佐野、中野、村田、牧野、野々村、明田、東、岸野
 3段目：泉川、伊地知、土屋、西庄、人見、岡本、西條、中村、橋本
 4段目：三木、長谷川、徳久、吉村、高井、山口、丸山、中田、弓場、河井
 最前列：福田(妻)、福田、高吉、森本、岡本、藤川、伊藤、江原、杉岡、村松、湧田

しながら、2次会会場の軽軽に向かいました。

2次会会場でもそれぞれのテーブルで話が盛り上がっていたようですが、私は子連れだったため、19時過ぎに会場を後にしました。子供の相手をして下さった皆様、ありがとうございました。

同窓会は終始和やかな雰囲気で行いましたが、皆の雰囲気は学生時代と変わっていないようです。また、仕事をしている人は皆真摯に医療に取り組んでおり、同窓生として誇らしいなと感じました。次回同窓会の予定は決まっていますが、また開催される際に恥ずかしくないよう、しっかり仕事をしていきたいと思えます。

最後になりましたが、遠路遥々参加してくれた同窓生の皆様と同窓会開催にあたり援助して頂きました讃樹會に深謝いたします。



第12回関東支部会同窓会に参加して

野村 直人（平成3年卒）

思えば、関東支部会の同窓会への参加は長い間、憧れの対象であり夢でもあった。千葉県船橋高校出身でありながら、当時まだ一般的ではなかった全科ローテートに近い研修先を求め、地元でも出身大学でもない名古屋大学の関連病院で研修を開始した自分は、卒業後16年間東海地方の病院を転々としていたが、時折届く同窓会誌には会への参加報告が掲載されており、その楽しそうな写真と文面を見るたびに、何とも羨ましい気持ちになったものだった。

7年ほど前の春、実家近くに帰ることになり、秋に初めて参加させていただいたが、そのときの会場は東京さぬき倶楽部。何とも秘密めいたネーミングで、ライトアップされた東京タワーを近くに見上げる麻布十番の入り組んだ路地を歩きながら、遠く離れた東京に讃岐の人たちの心の拠りどころとなるような場所があることにも感動した覚えがある。神保先生を始めとする元教官の先生方も参加され、昔の同級生との思いがけない再会とともに、諸先輩方や同門の方々の熱い思いと強い絆を直に感じ、日々の診療において励みになったものだった。

その後はなかなか都合が合わず、3年前に品川で開かれた際に参加させていただいたが、開業を間近に控えていた時期に有意義な情報をいただき、非常に心強い思いをした。また、その年の春に不慮の事故で亡くなられた川口さんのこともご報告をして、共に故人を偲ぶこともできた。

そして今回、平成25年11月24日、雲ひとつない秋晴れの横浜港を見渡すことができるニューグランドホテルの最上階で、第12回関東支部会同窓会が開催された。



残念ながら教官の先生方のご参加はなかったが、出席されている諸先生方が、それぞれのフィールドでご活躍されている姿を目の当たりにすることができ、人生としては峠を過ぎてしまった自分ながら、まだまだ頑張っていける自信を持つことができました。また、かつて、あの男井間池を見下ろし、白山を遠くに望む丘の上で、うどんの存在を身近に感じながら、ともに青春時代を過ごしたという共通の体験を持っているだけで、すぐに近い距離になれる連帯感がとてもうれしかった。大学によっては同窓生同士の関係があまり良好ではなく、同窓会どころか顔を合わせるのも嫌がる場合もあると聞いたことがあり、あの路頭に迷っていた5年間の後に香川医大で学ぶご縁をいただいた幸運を改めて感じた。さらには、各地の支部会が次々と会を開かなくなる中で、地道に毎年開催されてきたのは、初代支部会長の伊藤正裕先生（2期生）や2代目江藤誠司先生（1期生）のご尽力によるものであり、そして現在、支部会長を引き継がれている3代目伊藤理先生（3期





後列：白井隆之、井上茂亮、松田陽子、幾世橋佳、三宅康弘、谷守通、辻友篤
中央：杉田礼典、内山順三、赤沼真夫、野村直人、池ノ谷紘平
前列：伊藤美奈子、木林和彦、坂本和裕、内田光一、伊藤理、北窓隆子、田中淳一、古市眞

生)のお人柄と陰で支えられた奥様の内助の功だと思
うと、頭の下がる思いでもあった。

今回会場になったニューグランドホテルは、大正12年の関東大地震で壊滅的な被害を受けた横浜港に、瓦礫を埋め立てて造られた山下公園とともに復興のシンボルとして昭和2年に建設されたとのこと。この由緒正しく数々の映画やドラマの舞台(最近では半沢直樹の撮影にも使われたとのこと)ともなったホテルで開かれたのも、幹事の伊藤先生ご夫妻が勤務されている横浜市立みなと赤十字病院との繋がりがあってのこととお聞きしたが、87年が経過し老舗となった今でも“ニュー”とは40年が経過しても色褪せないユーミンのニューミュージックと同じだな、などと考えていたら、新設医大として讃岐の丘に建てられた香川医大とイメージが重なった。そう、創立からもうじき34年が経過するわが母校は、その後医学部の新設が許可されない状況もあり、いつまでも医学界では新参者扱い?しかし、今回集まった諸先生方だけでなく各地で活躍されている同窓生の姿を見るにつけ、もう立派な中堅の医大として、医学界だけではなく存在感を示していると感じた。と同時に、積み重ねられた伝統を大切にしつつも、ある意味硬直化してしまった古参の医学部にはない視点で、いつまでも新鮮な風を吹き込める存在であれたらいいなあとも思った。

一次会終了後は、かつての同級生の赤沼さん、内山に、2期先輩の古市先生も加わっていただき中華街の店で杯を交わした。ここでも、いろいろと有意義なお話を伺うことができたが、店の娘の策略にまんまと引っ掛かったわれわれは、古市さんが先に帰られた後も飲み続け、ビールジョッキを何杯も空けた上で、さ

らに少なくともひとり老酒1本以上は飲んだようだが、正確な量も料金も誰も覚えていないほど楽しい時を過ごすことができた。

帰りは電車を何度か乗り過ごし、自宅の最寄駅を数回通過した後ようやく自宅に帰りついたようであったが、酔いが醒めてFacebookを開くと香川医大のページで皆さん、会の報告をされていた。今回、以前からFB上では友達であった木林先生ともきちんと面識を持つことができたし、谷先生とも新たに友達となることができた。そして、FBに掲載したコメントに対し、参加されなかった全国各地の同窓生から温かくて心のこもったコメントや“いいね!”をいただくにつけ、改めて心から“香川医大、いいねえ!”と感じた秋の1日であった……



▲2次会も楽しく!
前列左から野村、古市、赤沼、(上)内山



香川大学医学部ヨット部30周年記念祝賀会に参加して

榎本祥太郎（平成7年卒）

2013年9月30日JRホテルクレメント高松にて、香川大学医学部ヨット部30周年記念祝賀会が開催された。ヨット部前顧問で恩師である村主節雄先生（前香川大学医動物学准教授）をはじめ、多数のOBが全国から参集した。これまでヨット部の大きな会としては、2003年の20周年記念祝賀会や2009年の村主先生退官記念祝賀会などがあり、今回はそれ以来の記念祝賀会となった。現在は、大学病院、研究機関、市中病院勤務や開業など、職場も立場も大きく異なる面々だが、世代を超えてヨット部という繋がり、こうして集まることができるのは、なんて幸せなことなのだろうと感じた。

懐かしい先輩や後輩と大声で雑談しながら会場に入り、OB総会（西医体結果報告、OB会運営方針決定、物故者追悼など）に参加しながら、ヨット部がこれまで歩んだ歴史を思い返していた。私が所属していた1980年代後半から1990年代前半は、諸先輩方の創部から数年間の大変苦勞された「捨て石」と言われた時代から少しずつ脱却し、部員数や所有艇数の増加で練習環境などが整ってきた頃で、西医体でメダルを取ることがようやくできはじめた時期であった。その頃はまだOB会など存在するはずはなく、ヨット部はまだまだこれからの感がしていた。私達の世代が卒業した後、有馬信男先生（現香川大学整形外科准教授）を会長として、1997年にOB会が創設された。現役へのバックアップ体制が次第に整い、多くの面でもようやく「形」になってきた。2000年代に入ると、念願であった西医

体ヨット部門総合優勝を何度も達成し、医学部の常勝クラブとなることができた。また、全日本インカレや全日本選手権、国体などにも出場する強者部員やOBも出てきた。そして今年は、OBの長年にわたる「思い」を背負った現役部員達の頑張りによって、西医体ヨット部門完全総合優勝（470級優勝、スナイプ級優勝）という、他の歴史ある大学の医学部ヨット部でもなかなか成し遂げることのできない華々しい成績をあげてくれた。この事は今回の記念式典に花を添える形となり、OB全員にとって望外の喜びとなった。

OB総会終了後に集合写真（写真1）を撮影して、ついに祝賀会が始まった。先輩方も自分も後輩達もみな年月を経て、色々な人生経験をしてきているので、学生当時より少しは大人になっているはずなのだが、先輩・後輩の序列は当時のまま、話す様子も内容も学生時代と全く変わらない。いい感じに酒が入って酔いが回ってくると大いに盛り上がり、色々な昔話に花が咲いた（写真2）。すべらない話がよくこれだけあるなというほど、腹を抱えて笑えるネタや驚くネタばかり。裏を返せば、それだけ濃厚かつスパイシーな学生生活を過ごすことができたのも、若くかけがえのない学生時代に毎週土日や夏休みを返上してヨット部で頑張ったからなのだと思う。締めに参加者全員で会場全周に渡る大円陣を組み、恒例のエールを大声で切って一次会は終了した。

テンションが高まったまま、二次会はホテルのトップラウンジへ移動して行われた。西医体の優勝カップ



写真1 香川大学医学部ヨット部OB会30周年記念 平成25年9月28日 於 JRホテルクレメント高松

になみなみと酒を注ぎ、回し飲みが始まった(写真3)。後輩達の成果を自分達のこのように喜ぶことは、なんて素晴らしいことなのだろうとOB皆が感じ、じわりと嬉し涙が出た至福の瞬間だった。そう、これがまさにヨット部の「伝統」が培われてきた証明なのだろう。

祝賀会の翌日は、ホームグラウンドである大的場沖でOBと現役部員混在のレースが行われる予定だった。しかし、この日はかなりの強風のため白波が立つ厳しい状況で、OB達はビビってしまい二の足を踏んでいた。そんな中、ヨット部創設期の大先輩である青田洋一先生(現横浜市立脳血管医療センター副病院長)は、颯爽と470級に乗りこみ、現役部員に負けずとも劣らない素晴らしいセイリングを見せていた。ちなみに、臆病者でメタボな私達は、レスキューボートの上から匂のイダコ釣りをのんびり楽しみ、ほかほか陽気の下で冷えた缶ビールを飲んでいた。もはやヨットセイラーではなく、ただのおヤジであった(笑)。

今回の30周年記念祝賀会を通して、ヨット部が「捨て石」の時代から部としての「形」になり、OBや現役部員の「思い」が実って「伝統」が培われてきたことを実感した。これはまさに、20年以上前から村主先生に何度も教えをいただいていた部のあり方そのものであった。おそらく今後もこれまで同様に、多くの困難があるだろうし、それ以上に多くの喜びもあるだろう。ただ希望することは、ヨット部とOB会が今後も存続、発展し、皆でまた元気に集まれることを願うのみである。最後に、今回の祝賀会にあたって多くの準備や煩雑な事務処理を担当してくれた、幹事で後輩の牛山貴文先生(現牛山クリニック院長)に感謝を申し上げ、ペンを置きたい。

香川大学医学部ヨット部30周年記念式典を開催して

牛山 貴文(平成10年卒)

2013年9月30日、JRホテルクレメント高松にて香川大学医学部ヨット部30周年記念式典を開催した。開催した、というのは、今回、この記念式典を行うに際して、ひよんなことから不肖ながら私が、諸先輩方を差し置いて幹事を務めることになったためだ。

わがヨット部は、部の創成期から成熟期へと成長し、今では西医体でメダルの常連といわれるような強豪校になっている。そんな中で1997年にOB会が設立されてから、OB数は徐々に増え続け、現在では70人以上の会員数となっている。OB会の主な趣旨は、OB会費(寄付金)を徴収しクラブに還元することと、年に1回のOB会を開催し皆が集う、いわゆる同窓会を行うことである。しかしながら、創立後ややマンネリ化した状態が続き、最近ではOB会への出席者の減少、OB会費の減少が問題となっていた。そんななか、今回30周年記念式典を開催するにあたり、なんとか多くの参加者を集めたいと思っていたところに、現役部員が今年の西医体で見事完全優勝を勝ち取ってくれた。西医体のヨット競技には2種類のクラス(470、スナイプ級)があり、わがヨット部は総合優勝や片クラスの優勝経験はあっても、2クラスともに優勝の完全優勝は未達成であったのだ。この快挙で、全ヨット部OBが奮い立ち、今回の式典にも多数の参加者が見込まれることを確信した。

まずは、全国に散らばったOBへ30周年記念式典を周知し、かつ参加を募った。これが一番大変で、皆第一線で活躍する医師・看護師であるから、返事がない人、音信不通の人が続出する。現役部員でネットやパソコンに精通した部員を使いながら、何とか連絡を取っていった。今までのOB会は創立以来、現会長兼



写真2



写真3

顧問である有馬信男先生(現香川大学整形外科准教授)が激務の中で切り盛りしてこられた。そこで今回の総会を機に、今後のOB会の運営方針、各部署の組織の構築を決定し、代々会長や各部署が踏襲されていくようにしていきたいと考えていた。そのため、過半数以上の出席者が必要であったが、何とか50人程度の出席者を見込めるようになった。

当日は、まずOB会総会を開催し、各事項を決定していった。限られた時間であるし、何とか最低限の内容を決めることができた。集合写真を撮影し、いよいよ式典へ。初代顧問であられた村主節男先生(前香川大学医動物学准教授)にお言葉をいただき、開会した。一同に会し、お酒が入れば皆、学生当時の顔に戻り昔話に花が咲く。あっという間に時間が過ぎていった。宴もたけなわのところで、現役当時のスライドを世代ごとに流していった。このスライドを作る作業がまた大変で、何とか面白い写真を収集し、昔のいわゆる“写真”をメディアに取り込むのに苦勞した。当時のスライド1枚1枚に会場のあちらこちらからコメントが入る。今の立場からは想像もつかないフォークシガーのような長髪、とても露見できないような○出し写真。皆、当時に思いをはせ、へ～そうだったのか、といろいろな暴露話も出てくる。最後は時間切れ

で、巻いて巻いて、皆でエールを切って会は終了した。そのあとは2次会、締めはうどんとお決まりのコース。これも学生時代と変わらない。楽しい時間であった。

翌日は、現役時代を過ごした大の場のヨットハーバーでOBレース。の予定であったが、皆長年のブランクを不安視してか、モーターボートの上で釣りに興じ、現役部員の練習を観戦。現役時代からは想像もつかない色白い中年男たちが、ボート上で日向ぼっこをしていた。

今回、式典の幹事を務めるにあたり、まず考えたことは、できるだけ多くのOBに集まってもらうこと。楽しい時間を過ごしていただき、また来たい、と思える会を行うことだった。今後も皆が普段の立場、激務を忘れ、学生時代の仲間に戻れる会であり続けたい。



参加者 (卒年順)

村主 節雄 (初代顧問)

吉鷹 秀範 (昭62) ・青田 洋一 (昭62) ・有馬 信男 (平2・現顧問) ・日下 隆 (平3) ・
 間島 圭一 (平3) ・眞鍋 大輔 (平5) ・高山 和浩 (平5) ・山本 議仁 (平5) ・榎本祥太郎 (平7) ・
 福原 政作 (平7) ・高尾 努 (平7) ・牛山 貴文 (平10) ・鮎田 栄治 (平10) ・澤田 真也 (平10) ・
 福原理恵子 (平10) ・高橋 英幸 (平11) ・畠山 哲宗 (平11) ・福田 恒輝 (平12) ・黒住 知宏 (平15) ・
 山上 佳樹 (平16) ・谷本 直樹 (平16) ・田中絵里子 (平16) ・田中 智子 (平17) ・須藤 広誠 (平18) ・
 河内 雅章 (平19) ・高砂 縁 (平21) ・阪口 志帆 (平23) ・西部伊千恵 (平24) ・三浦 高慶 (平24) ・
 清水康太郎 (平25)

香川大学ヨット部創部30周年の夏

医学科5年（29回生） 向原 史晃

2013年夏、第65回西医体において、我が香川大学医学部ヨット部は470級優勝・スナイブ級優勝の総合完全優勝を達成いたしました。これは今年30周年を迎える香川大学医学部ヨット部において史上初の快挙です。

とはいえ、多くの方はヨットという競技がどのようなものであるかご存じでないと思います。ヨットレースは、海上に浮かぶマークを定められた順番に回航し、その順位によって得点が与えられる競技です。着順の早いものから低い得点となり、大会の全レースが終了した時点で最も低かった艇が優勝となります。刻一刻と変化する海面や風の状況を読み、相手の艇との駆け引きを制しなければなりません。また、タイムトライアルのようにゴールまでの時間を競う競技ではないため、勝たなければならない相手をマークするなどの戦略も必要になってきます。西医体では470級・スナイブ級という2種類の2人乗り艇の合計得点で総合優勝を狙います。

またほとんどの大きなヨットレースは1つの大会期間中に何日間もかけて8～12レースを行い、その合計得点を競います。今回の西医体では3日間で計8レースを行う日程でした。たとえ1日目の成績が良かったとしても2日目以降も調子を維持出来るか、また逆に1日目不振ななかったとしてもどうやって気持ちを切り替えることが出来るか、というようにメンタルも非常に重要になる競技です。

今年の西医体のヨット競技ですが、九州ブロック主



出艇直前の様子。写真手前側がスナイブ級、写真中央が470級

幹ということで、福岡県福岡市小戸の福岡市ヨットハーバーにて開催されました。この福岡市ヨットハーバーは数多くの大学や社会人ヨットオーナーが拠点として活動しており、西日本のなかでも有数のヨットハーバーとして知られています。目の前に広がる玄界灘は時に船をもなぎ倒す強風に見舞われることもあるほど、風に恵まれた海です。また、この福岡市ヨットハーバーは12年前にも第53回西医体が開催されており、その時のヨット競技総合優勝校も我が香川医科大学ヨット部であるという私達にとって縁起のいい会場でした。当初は瀬戸内海の練習ではなかなか経験できない強風を心配していましたが、今回の大会期間中は4～7m/sという私達が練習してきた風域で安定したことも私達に幸いました。

さらに今回私は、これまで部で14年間所有してきた29566艇ではなく、昨年9月にヨット部OB会の先生方より寄付していただいた辻堂加工製31108艇に乗って西医体に出場しました。私が乗るスナイブ級は1艇が約180万円と非常に高額であり、個人で購入することは到底できません。とはいえ学校に購入していただくのもなかなか難しいため、以前購入してもらった艇でも耐用年数を越えて使用し続けているのが現状でした。私自身も29566艇に4年間乗り続けており、こちらも非常に愛着のある艇だったのですが、実際に新艇31108艇に乗ってみると今までの艇とは段違いに速く、素晴らしいパフォーマンスを発揮することが出来ました。ヨット競技は自分の体だけではできません。体力



帰着後の反省と作戦会議



も技術も精神力も必要ですが、それらと同じくらい良い艇が必要です。どうしても学生だけでは資金的に続けられない部分があり、学校やOBの先生方に支援していただかなければならない面も少なからずあるのが事実です。

大会初日、北東から入ってくる風が安定するのをまって午後11時頃第1レース開始となりました。私と同じ5年生で470級の斎藤君が第1レース1位でフィニッシュし、香川大学医学部ヨット部は絶好調の滑り出しを見せました。昼に一度陸に帰ってきた時の斎藤君とクルーの井門君の笑顔がとても印象的だったのを今でも覚えています。かくいう私も他大学のミスが幸いして1日目終了時点でスナイブ級1位と素晴らしい滑り出しでした。ただ、まだレースは始まったばかり。2日目に注意すべき相手大学について入念にミーティングを行い、翌日のレースに備えました。

大会2日目というのは香川大学医学部ヨット部にとって例年何かしらトラブルが起こりがちな印象があります。が斎藤君の470級は引き続き安定した走りを見せ1位に立ち、スナイブ級もミスは出たものの無事に首位をキープすることに成功しました。残すは大会最終日のみです。この時点では2位以下とはかなり僅差だったのですが、ここまでくると先輩方も悲願の総合完全優勝に期待していただき、また後輩たちもすぐ目の前まで見えた優勝カップに期待を隠せない様子だったように思います。

そして大会最終日、その日の1レース目終了時点でスナイブ級1位・470級2位をとったことで、最終レースを待たずして総合完全優勝を決めることが出来ました。陸上で待っていてくれた先輩方や後輩たちはものすごく盛り上

がっていました。が、ただ一人私だけは得点計算の勘違いから、その事に気付いておらず、最後のレースが終わるまで緊張の中にいました。それでも最終レースを終えて優勝確定とわかったとき、思わず涙がこみ上げてきました。目標として掲げてきたところによりやう立つことが出来たことに感極まってしまいました。

今回の総合完全優勝は本当に多くの方々の協力によって達成することが出来ました。いつも温かく見守ってくださる顧問の有馬先生をはじめ、掲示板などを通じて応援していただき新艇・新セイルを寄付していただいたOBの先生方、現役続行というわがままに付き合ってくれた同期の斎藤君、頼りなかった私を支え続けてくれた後輩達、ベテランヨットマンとしてアドバイスをくださった社会人セイラーの方々、自分たちの練習もあるのに私達の練習に付き合ってくれた香川大学ヨット部や高校ヨット部の部員の皆さん、そして色々とお世話になっている香川大学医学部学務室の皆様など、本当に多くの人達の支えがあって初めて手になることが出来た金メダルだと思っています。

これまで過去2年間主力選手として西医体に挑戦したものの、過去の先輩方の栄光には全く届かない散々な成績でした。そんな私達がつかんだ完全優勝だからこそ、現役の部員はもちろん、見守ってきてくださった先輩方にとっても感慨深いものだったようです。私たちは今回で引退となってしまおうのですが、今度は後輩たちが香川大学医学部ヨットを盛り上げていけると信じています。マイナースポーツでなかなか部員が集まりにくいという問題もありますが、もっと多くの人に風を切って走るヨットの魅力を感じて貰えるよう、そして速い香川大学医学部ヨット部を続けていけるよう頑張っておサポートしていきます。



大会終了後、部員でとった集合写真

ACLS活動報告

広げよう救命の連鎖～救命処置の普及を目指して～

香川大学医学部 学生ACLS勉強会
代表 医学科4年 山村 将

私たち学生ACLS勉強会は、「あなたの目の前で大切な人が倒れたとき、あなたには何ができますか?」という考えのもと、自分たちが一次救命処置や二次救命処置を学ぶだけではなく、学生が主体となって講習会を開催することにより、医学生のみならず医療に携わらない一般の方々に対して救命処置を普及させる活動を行っています。現在は医学科・看護科を合わせて約20名が所属しています。

香川大学、大学職員の皆様、そして讃樹會のご理解とご支援により、本年度も充実した活動を行うことができました。誠にありがとうございました。心より感謝し本年度の講習会に関してご報告させていただきます。

BLS/AED講習会とボランティア活動

8月から12月にかけて、香川大学公認サークル代表者約100名が参加するリーダー講習会、トライアスロンの救護班ボランティア、香川大学医学展、丸亀町商店街での講習会、世界糖尿病デーイベントでの救護班ボランティア、三豊市のサテライトオフィスにおける講習会を行いました。

香川大学医学部 学生ICLS講習会

7月に第15回、12月に第16回ICLS講習会を開催しました。ICLS講習会とは、心肺停止後の最初の10分間に的を絞った対処法の取得を目指すコースです。受講生は5～6名で1つのグループとなり、グループごとに学生インストラクターが5～6名担当し救命蘇生法を詳しく指導しました。講義だけではなく、実際に体を動かす体験型の学習です。普段の座学だけでは学べない、チームで動くことで、チーム医療の大切さと、「誰かが」ではなく「自分が」という主体性の大切さを実感してもらえたと自負しております。

現在AEDは駅や学校、自動販売機等、公共の場に設置されて普及されてきましたが、知識として知っていても実践は難しいものです。

実際、講習会に参加された方からも「使うとなると難しい」というお話が聞けました。緊急時に一歩踏み出す勇気と、「自分はできる」という自信を持っていたかのように頑張りたいと思っています。また、第16



第15回



商店街の講習会



学祭の医学展



第16回

回では徳島大学医学部生も見学・参加しています。今後四国の大学合同講習会の開催も視野に入れて活動していきたいと思っています。

このような貴重な活動の機会を与えていただき、本当にありがとうございました。



平成25年10月11日から13日にかけて、第34回香川大学医学部祭が行われました。

今年の医学部祭のテーマは「はじける☆シナプス～進撃のキャベノミクス～」でした。「弾ける」とは俗語で祭を体全体で楽しむという意味を持ち、楽しさが弾けると言った使い方をされるのですが、我々医学部生の弾け方は少し違います。学祭を人間の体に例えると、私たちの友情や信頼関係はさしずめシナプス（神経接合部）だと言えます。私たち一人一人が医学部祭への熱い思いを互いにぶつけ合い、弾けさせ、昇華させることで、私たち医学部祭実行委員はもちろん、他の学生やお客様全員が全てを忘れて弾けつくすことのできる医学部祭を作る。それこそが私“キャベツ”こと水井が今年度に掲げるマニフェストでした。これを今年弾けるような人気を博した漫画『進撃の巨人』、政治家安倍晋三氏の政策「アベノミクス」を形取って本年度の医学部祭のテーマとさせていただきました。

そしてこのテーマに恥じぬ医学部祭にするため、4月に共に医学部祭を創り上げる実行委員を募り、5月からパンフレットやスポンサーの仕事が始まりました。さらには会場運営計画や当日のステージ企画、医学展など、本番までの半年間は忙しいながらも充実した日々となりました。迎えた当日も天候に恵まれ、“はじけた”医学部祭となりました。

また、例年に引き続き本年度も医学展の場におきまして、3大学連携企画として徳島文理大学・県立保健医療大学の方々と協力して医学展を行うことができました。さらに徳島文理大学や県立保健医療大学の学祭



においても3大学連携企画を執り行うことが出来ました。地域の方々を始め、遠方から来ていただいたお客様にもたくさん来場していただき、交流を深めることが出来ました。また、お客様に限らず、私達3大学の生徒は、将来には同じ医療従事者として働く身でありますので、チーム医療を担う者同士、こういった交流が今後も続いていくことを切に願います。例年では軽音楽部による前夜祭の音響の騒音に関して、近隣住民の方々に多大なご迷惑をおかけしてしまいました。本年度は学務室の方々と来年度の実行委員長、軽音楽部の担当者との試行錯誤の結果、騒音に関する御指摘を頂くことなく本番を終えることが出来ました。

今年は本学で不祥事が発生し、学生一同がこの事件を大きく捉えるべきであるため、医学部祭を開催することの是非を検討する必要性がありました。しかし、当

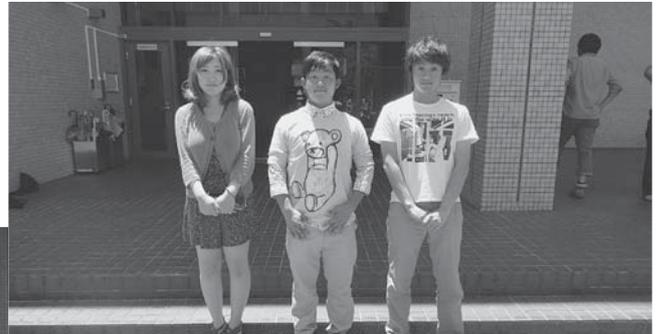


医学部祭は本学の伝統行事であり、先輩方から代々引き継いできたものであります。その為いかなる形式であれ“第34回”医学部祭を開催し来年以降に引き継ぐべきであるという結論に至り、大学や同窓会の先生方のご高配のもと、本年度も医学部祭を開催できる次第となりました。

副実行委員長の任期を合わせたこの2年間の挑戦は決して楽なものではなく、様々な分野、特に勉学との両立や人間関係において多くの挫折を体験しました。時には己と感情を切り離すことを強いられたこともありましたが、しかし一方で様々な人に出会い、感謝する機会にも恵まれました。なんらかの障壁を乗り越えたときには必ず人との助け合いがあったことに気づき、

人間として大きく成長できたように感じます。

最後になりましたが、医学部祭開催にあたりましてご協力いただきました多くの方々やスポンサーの方々、医師会や讃樹會の方々、香川大学医学部の教職員の方々、学務室の方々、そして実行委員のみんなにこの場を借りて厚くお礼申し上げます。本当にありがとうございました。



半年間両脇で支えてくれた副実行委員長2人。
本当にありがとう。



実行委員全員集合！半年後には更に笑顔になっていました。

香川大学医学部医学科同窓会讃樹會 平成26年度研究助成金／奨励金応募要領

1. 研究助成の目的

学内外で活躍している同窓生の行っている研究活動をサポートし、それらの社会への還元を促進すること。

2. 助成対象者

研究助成金：香川大学医学部(旧香川医科大学)医学科同窓会の会員で卒後25年以内の者で申請時より遡って5年間(準会員期間を含む)の会費を納入している者。

研究奨励金：香川大学医学部(旧香川医科大学)医学科同窓会の会員で卒後15年以内の者で申請時より遡って5年間(準会員期間を含む)の会費を納入している者。

研究助成金は、1回受賞した後はインターバルを3年置いて再度申請が出来る。

研究奨励金は、1回の受賞をもってその後の申請は出来ないこととする。

尚、両者を同時に応募することはできない。

3. 助成期間 1年間

4. 助成金額

研究助成金：1,000千円を1名。

研究奨励金：500千円を1名。

5. 選考方法

外部評価者による厳正な審査を経て、讃樹會理事会で決定する。

6. 研究成果の報告義務

(1) 研究助成を受けた方は、助成研究の結果(助成研究報告書)と研究助成金の使途明細(助成研究会計報告)を、助成2年後の平成28年4月30日までに提出する。

(2) 助成研究の成果を助成研究発表会で発表する(日時・形式については別途連絡)。

(3) 助成研究の成果は、原則として学術誌に投稿すると共に、別刷一部を提出する。

(4) 過去において助成された実績がある応募者は、その助成課題に対して学術誌に投稿(受理を含む)しておれば、別刷一部を添付。ただし、既に提出済みの別刷はその必要はない。論文に讃樹會への謝辞が記載されていないものについては、受け付けない。

(5) 以上の報告義務を怠った場合には、助成金の返却を求める場合がある。

尚、やむを得ず申請者が手続きを完了できない場合には、共同研究者によってすべての報告が代行されるものとする。またこのような事が生じた場合は、総合的な責任は推薦者に発生するものとする。

7. 平成26年度申請手続き

(1) 申請書

讃樹會所定の申請書「第1号～第8号様式」を書面で「書留便」などの確実な方法で提出のこと。提出部数は原本各1部、複写各4部。申請書は讃樹會HPからダウンロードして下さい。

(2) 受付期間

平成26年2月1日～平成26年4月30日(締切日必着)。

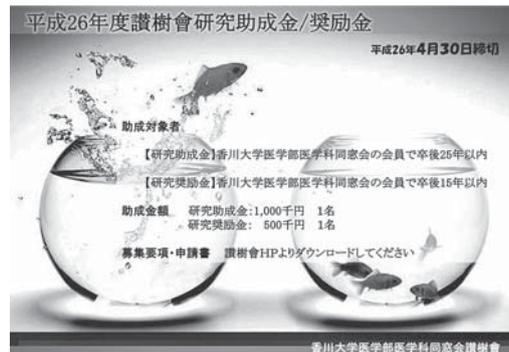
(3) 提出先

〒761-0793 香川県木田郡三木町池戸1750-1
香川大学医学部医学科同窓会讃樹會 担当 柚山
TEL・FAX：087-840-2291
URL：http://www.kms.ac.jp/~dousou/
E-mail：dousou@med.kagawa-u.ac.jp

8. 選考結果の通知

結果は文書で通知する(平成26年8月の予定)。

尚、提出書類は返却しない。



編集後記

皆様、新年おめでとうございます。昨年はアベノミクスや2020年の東京オリンピック・パラリンピック開催も決定などで、日本全体が上昇の兆しが見え始めた1年であったと思います。今年は、讃樹會会長選挙そして理事選挙が行われますので、同窓としても飛躍の年になればと祈念しております。

さて、皆様方のおかげで会報第47号を発刊することができました。心より御礼申し上げます。本学教授にご就任されました山本融先生、お忙しい中、ご寄稿いただき感謝申し上げます。副学長をご退官されました阪本晴彦先生、新たに副学長にご就任されました板野俊文先生、笥善行先生、ご挨拶いただきありがとうございました。

本号から新シリーズとして「創部ものがたり」が始まりました。今回は硬式庭球部で、とても懐かしくそして楽しく読んでいただける内容です。今後も楽しいシリーズになると思います。他に讃樹會主催の市民公開講座報告、留学レポート、学生さんの課外活動報告、お馴染みの「10年後の私の10年後」など盛りだくさんで充実した内容になったと思います。研究助成金および奨励金、国外留学助成金を受賞された先生方のご活躍を祈念したいと存じます。清水久太郎先生、古谷保人先生には、心よりご冥福をお祈り申し上げます。追悼文をご寄稿いただきました藤村貴志先生、大西英周先生に感謝申し上げます。本号にご寄稿いただきました先生方、学生さん、そして事務局の柚山稲子様に感謝申し上げます。

今後も同窓の皆様方の近況などのご寄稿を賜りたいと思っております。何卒よろしくお願い申し上げます。最後に同窓の皆様方のご活躍とご健康を心より祈念申し上げます。

平成26年1月 讃樹會広報局長 中村丈洋（平成7年卒）

事務局からのお知らせ

【連絡・問合せ先】

TEL 087-840-2291

E-mail dousou@med.kagawa-u.ac.jp

◆平成23年度卒業生（26期生）の方で、卒業アルバムを申し込み後、まだお手元に届いていない方は同窓会事務局まで連絡下さい。1冊預かっています。

◆医師賠償責任保険を年間を通じて受け付けています。途中加入もできます。事務局までお問い合わせください。

◆同窓会、懇親会を開催する際には、参加者10人以上で一人3000円の支援がありますので是非ご利用下さい。申請書を、讃樹會HPからダウンロード、又は直接メールで問い合わせいただいても結構です。

◆国外留学助成金の申込は年2回です。直近の締切は本年3月末日です。次は本年9月末日となります。

讃樹會HPから、要項及び申請書をダウンロードしてお申込み下さい。

◆研究助成金の申込締切は毎年4月末日です。ふるってご応募下さい。

讃樹會HPから、要項及び申請書をダウンロードしてお申込み下さい。

訃報

名誉会員

清水久太郎先生 元香川大学医学部附属病院長
2012年 秋

正会員

古谷 保人先生 平成2年卒（第5期生）
2013年7月

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

診療科だより

香川大学医学部附属病院 皮膚科

森上 徹也
(平成7年卒)

同窓会の先生方におかれましては、平素より大変お世話になっております。今回は、私ども皮膚科の紹介をさせていただきます。

1. 当科のメンバーについて：

当科のメンバーは科長である窪田泰夫教授のもと、米田耕造准教授、森上徹也病院講師、中井浩三病院講師のほか、助教4名、医員2名の合計10名です。専門医は、日本皮膚科学会認定皮膚科専門医6名、日本皮膚科学会認定皮膚悪性腫瘍指導専門医1名、日本レーザー医学会認定レーザー専門医1名、同レーザー指導医1名、日本がん治療認定医機構認定がん治療認定医2名です。われわれは、「皮膚は心の鑑、皮膚は内臓の鑑」をスローガンに、皮膚の診療を通して患者さんの苦悩によりそい、また隠れた未病の発見を心がけています。

2. 外来診療について：

当科の外来診療時間は月、火、木、金の午前中です（水曜日は手術のため休診）。2012年の延べ外来診療件数は12,100件、新来患者数は1,044名で、うち467名が先生方からのご紹介でした。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

①アトピー性皮膚炎専門外来（窪田、米田）：基本となるステロイドと保湿剤の外用から、生活指導に至るまで、きめ細やかな診療を行っています。当科では、ステロイド軟膏とタクロリムス軟膏を組み合わせた連続外用療法を我が国でいち早く導入しました。本法により、それぞれの薬剤の長所を最大限引き出しながら、副作用を最小限に抑え、高い臨床効果とQOLの改善を得ています。また、患者さんに軟膏の塗り方を動画で説明したり、一人で背中に薬が塗れない患者さんのための外用補助器具の開発を行うなど、新しい取り組みも行っていきます。②乾癬外来（窪田、米田）：2010年に新しく保険承認された生物学的製剤は、これまで難治だった乾癬の治療状況を一変させ、患者さんのQOL改善に大きく貢献しました。乾癬外来では、上記の生物学的製剤の他、ステロイドやビタミンD3軟膏の外用療法やナローバンドUVBによる紫外線療法を行っています。また、乾癬患者に多いメタボリックシンドロームに関する生活指導も行う等、包括的な診療を行っています。③膠原病外来（窪田、米田）：膠原病は、皮膚に様々な異常を引き起こします。我々は皮膚を観察することで、体の中に隠れた膠原病の存在を知り、皮膚生検や血液検査等の各種検査を用いて診断を確定し、治療にあたっています。④皮膚遺伝病外来（米田）：

遺伝子の異常によって引き起こされる角化症や水疱症等、様々な遺伝性皮膚疾患を対象とした外来です。⑤皮膚悪性腫瘍外来（森上純子）：悪性黒色腫や有棘細胞癌など、あらゆる皮膚がんを対象とした外来です。⑥レーザー外来（森上徹也）：Qスイッチアレキサンドライトレーザー、ロングパルス色素レーザーで、あざやしみに対する治療を年間50件以上行っています。外来では照射が困難な乳幼児も、全身麻酔下にて積極的に治療しています。レーザー治療の適応でないあざ、しみでは、特殊なファンデーションによる化粧指導を行っています。⑦その他：ニキビ診療では、かつては化粧の併用は控えることが一般的でしたが、当科ではニキビ治療と化粧が両立可能であり、化粧をする事で患者さんのQOLが向上することを、世界にさきがけて報告しました。当科ではこの知見を発展させ、ニキビ患者に対する化粧指導を定期的に行っています。また、近年急速に普及している、各種悪性腫瘍に対する分子標的薬の副作用である手足症候群についても、院内外を問わず多くのご紹介を頂いています。

3. 入院診療について：

入院件数は年間約300件で、うち半数が腫瘍切除目的です。センチネルリンパ節生検も行っています。各種薬剤に対するアレルギー検査も行っています。

4. その他の活動：

病院全体の取り組みへの協力として、抗がん剤の点滴漏れ、造影剤の漏出、梅毒の針刺し事故等への初期対応、週1回の褥瘡回診、年1回の放射線従事者に対する皮膚検診を行っています。また、当科独自の社会貢献として、2009年から県内の山間部や島嶼部で無料の皮膚がん相談会を年1-2回開催しています。現在までに県内6カ所で累計100名以上の参加者があり、4例の皮膚がんを発見しています。以上、当科の活動について紹介させていただきました。当科は皮膚に関するあらゆる診療を行っています。今後ともご支援のほど、よろしく申し上げます。

